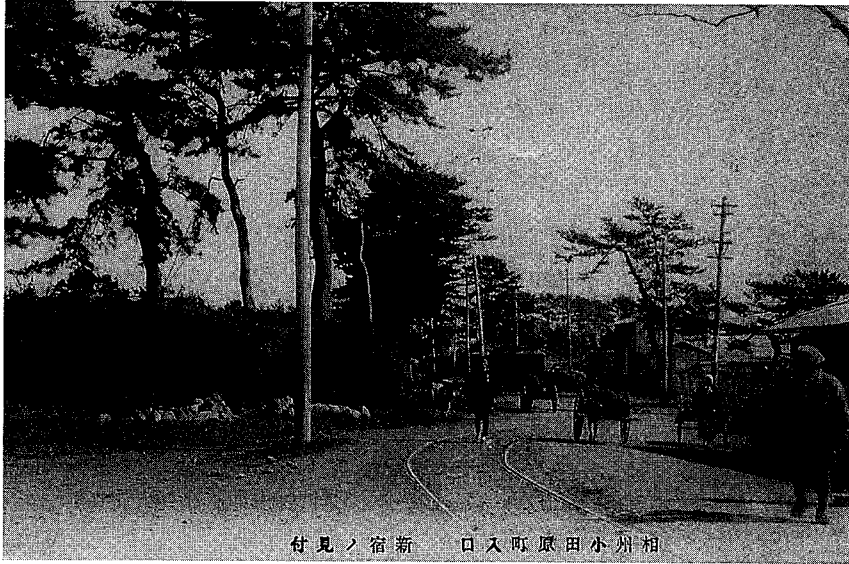


小田原史談

第 182 号

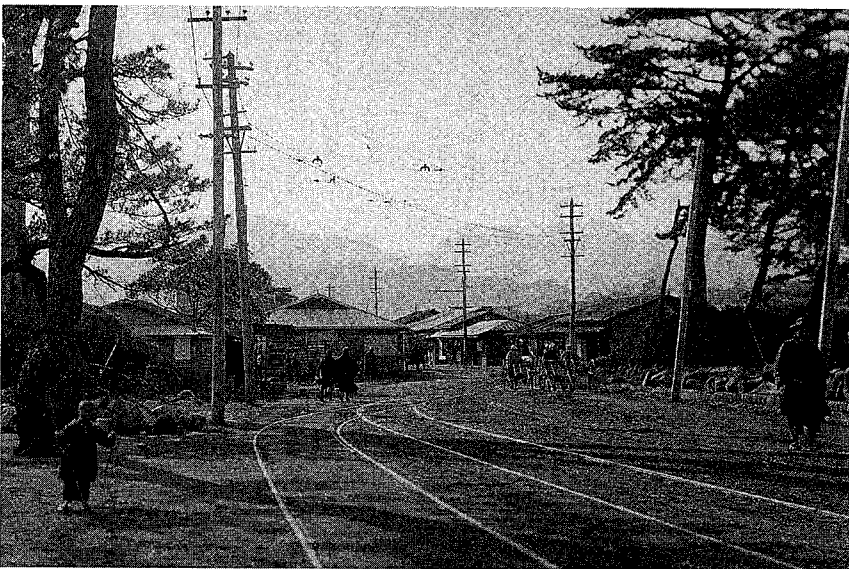
発行所 小田原史談会
小田原市栄町2-13-20
アオキ画廊内TEL(24)0637

江戸口見付跡の写真に思う



付見ノ宿新 口入町原田小州相

A. 西側からみた江戸口見付跡 提供 高野肇さん



B. 東側からみた江戸口見付跡 提供 桜木達夫さん

二枚の写真は、共に江戸口見付跡の情景です。上の写真(以下A)は西側の新宿から、下の写真(以下B)は東側の山王川寄りから、写したものです。

いつ頃に撮影したのか、よくわかりません。線路と電車が写っているので、大正九年(一九二〇)以前は確かです。

場所は今の浜町交番前の、国道一号线を横ぎる歩道橋周辺です。この

岡崎方面
史跡めぐりと案内
38 ページをご覧ください

際に「文部省指定史跡小田原城趾江戸口見付跡」という標柱がたっています。これが左右の道端にたつていて、昔、この空間に見付があったことを知らせています。

同じ人の撮影なのか、不明です。所有者は、A 高野肇さん(小田原市高野古書店)と、B 桜木達夫さん(箱根町湯本・さくらぎ薬局)です。

写真は共に、見付通りの線路を中心にした風景ですが、小田原の宣伝写真という趣です。Aに「相州小田原町入口新宿ノ見付」とあり、絵葉書の体裁になっております。

二枚に線路と荷車数台が目立ち、撮影当時の小田原を知らせている風情にみえます。

線路は、小田原電気鉄道(国府津箱根湯本間)が走っている区間を示しています。荷車数台は、荷物を運ぶ人の往来とみなします。往来は、国府津駅指向の趣です。(この時の国府津駅は、小田原・箱根・熱海方面への輸送中継拠点でした)。

電車や荷車等の往来は、活気ある小田原の町中の表情を知らせているように受けとりました。これには、明治初期の衰微した小田原町の姿が前提にあります。

電車や荷車の活動は、元気に立ちあがり、活気づく小田原を象徴する情景と見ました。鉄道開通の恩恵をうけて、小田原の地は近代的に蘇りました。この入口となった見付通りは、活気を運ぶ入口でもあったという見方です。(撮影当時)

また写真の情景に、小田原の発展の重なりを思いました。土壘や松並木等は、江戸期の城下町・宿場町として発展した小田原の表情を見せています。線路や電柱等は、近代的に新生した小田原の風情を知らせています。ここに、小田原独特の発展をひき出した巧みさを思います。

写真にある「相州小田原町入口新宿ノ見付」は、小田原が蘇り発展する力を運ぶ入口であることを主張しているように感じとりました。これにそった見付通りの選定で、牙えた観察力を察します。

撮影者の見識豊かなプロ(写真師)の、すばらしい感性や腕前・郷土愛が、見えかくれしていました。視点を交えて、二枚の写真の異同をみてゆきます。

異なる一は、前述したように写した位置の違いです。(被写体はA・B共に見付跡) 故に、Aの二台の荷車(後姿)は、国府津方面へ行く姿となります。Bの四台の荷車(後姿)は、小田原の町中方面へ行く姿となります。

その二は、単線・複線の違いです。Aにみえる単線が、小田原電気鉄道

の本来の作りです。Bの複線は、交換用の線路があったといわれています。するとBの位置は、国府津駅前発の電車と、箱根湯本駅の電車とが、すれちがう地点といえます。町の出入口の地点とあわせて、二つの営みをもった見付通りでした。

その三は、線路の湾曲地の違いです。Aのそれは今の交番前付近を示し、Bのそれは海側を示しており、従って二つの湾曲地といえて、Bの中にこれが見られます。

今度は、同じ現象をみてゆきます。一は、A・Bに荷車の往來が目立つことです。写した瞬間に、Aは三台、Bは五台も通っています。一日では、可成りの延通過台数になったと思われる。これは、町の活性化に貢献した働きと評価したいところ

です。その二は、Aの人力車位置(中央にみえる人物の左側)と、Bの四台の荷車位置は同じことです。この所は、三台の荷車が横並びでできる程、広い幅員であったこともわかりました。Aだけでは認識できなかった、人力車周辺の幅員でした。

その三は、Aの右端に見える家屋と、Bの中央の家屋は同一ということとです。線路、土壘、松をつきあわせ、整合性をみて、同じ家を納得しました。

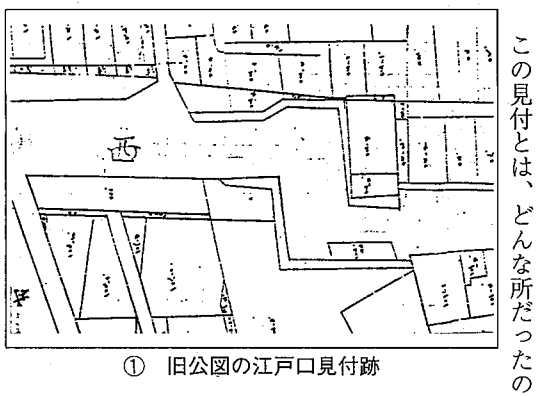
その他わかったことを、次に列挙してみます。①Bの左右に土壘がみられます。

後北條時代に土壘が築かれ、日本多数の大城郭が形成されたということです。この面影を残す土壘が、撮影当時は道の左右に残っていたということです。

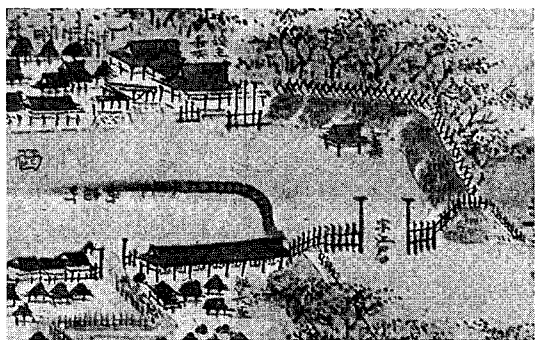
②Bの右に見える土壘は、隣の平屋の庇ほどの高さをみせており、これは現存する蓮正院際の土壘と、ほぼ同じ様な高さを見せていて、当時はつながっていた形態を想像しました。

③写真撮影した当時、二つの湾曲地間は、広い空間であり、道であったということとです。この空間は、江戸期の見付跡地と思う次第です。「小田原市史別編・城郭」をみると、「山王(江戸)口には、判然とした見付地形が見られない」とあります。写真では、「見付地形の痕跡が見られる」となる景観をみせております。

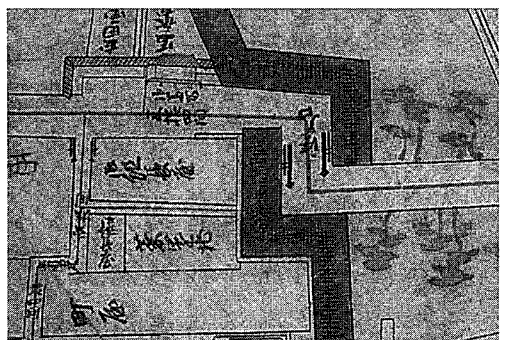
この見付とは、どんな所だったのか、歩道橋際の案内板は、次のように説明してました。



① 旧公園の江戸口見付跡



③ 東海道分限延絵図の江戸口見付



② 文久図の江戸口見付

「見付とは、城の枡形門に設けられた見張り番所であって、武器を用意し、昼夜番士が詰めて警戒にあたる場所である。」

江戸口見付は、東海道の江戸方面の出入口に設けられた見張り番所ということでした。

この江戸口見付を、次のように吟味しました。

①旧公図(明治期)より

図は、鍵の手の道路を一目瞭然にしています。この曲がった空間地帯が、枳形門の見付跡と推察します。この図面に、写真Bの右折し左折する線路は、ぴったり合つて、「なるほど」と合点しました。

②江戸期の小田原城絵図より、

「小田原市資料別編・城郭」に載っていた「文久図」の絵図です。この二重の土塁の中に、「江戸口」の文字と、大門や柵がみえます。

東側、西側、どちらから来ても、大門は脇側に位置しています。また遠くだと、わかりにくい大門の位置ともいえます。

土塁も高く築いて、大門や町中を隠し、不法侵入を阻んでいます。土塁の頂きの柵も同様の働きで、厳重に固めています。

いずれも、敵の侵入勢力をそぎ、防ぐという、戦略的意図から生まれた作りです。鍵の手の土塁は、大門をより助けるために構築された趣です。写真の湾曲した線路の先に、昔は大門があって、番士が見張っていた幻影がちらつきます。

江戸口見付の大門について、前述の市史は次のように解説しています。

「門は海(南)向きに矢来門を建て、両側に柵をめぐらせ、門の開きは一丈八尺三寸ほどであった。この木戸の門前には、一〇間×八間の長方形の空間があり……」

この有様は③『東海道分限延絵図』

にあつて、有力な傍証資料となりました。写真Aの湾曲した線路は、江戸口の大門の位置に相当し、山王川方向へ延びているとみなしました。二枚の写真は、由緒ある見付をひき出して立派です。当時の情景を伝えて、教育的、懐古的です。

写真の情景は、時勢に呑みこまれて消滅し、蘇る基盤も消え失せてしまいました。

第一次消滅は、大正九年の小田原駅開業後の、輸送体系激変期です。熱海線の一部・国府津—小田原間開通に伴つて、人や物の動きが熱海線に向くという現象がおきました。

小田原電気鉄道は、利用客減少の影響を受けて、大正九年十二月六日、国府津—小田原町役場前(今の市民会館前)間の営業運転を止めたといえます。『箱根登山鉄道のあゆみ』やがて線路もはずされて、新宿の地における鉄道景観は完全に消滅しました。写真の荷車群も、同じ運命をたどりしました。

第二次消滅は、大正十二年の関東大震災の時です。写真にみえる情景は、倒壊・崩落・損傷・炎上等の被害を受けたことが推察されます。

第三次消滅は、国道拡幅改修工事の時とみなします。写真Bの中央に見える家屋の今は、国道一号线の中間という状態とみえています。写真の情景は、すべて跡形もなく消え失せた現状です。

登記所に行つて、前述の家屋周辺土地譲渡を尋ねました。土地登記簿によると、該当の土地は、大正十五年九月五日に、時の内務省が買収し、九月八日、所有権移転の手続きをしたことがわかりました。

地目は公衆用道路となつていたので、道路用地として買収したことは明白です。これは、見付跡は道の中という認識に役立ちました。

内務省土木局発行の『道路改良事業概要』(昭和12年刊)は、国道改修を知らせていました。

「昭和八年度時局巨救国道改良事業調、改良区間、自足柄下郡酒匂村大字網一色、至同郡小田原町、延長二、二六三米、工種改築舗装、幅員一一〜二二米……」

この工事で、見付跡は道の中に消滅したように思えます。

今この地を、国道の中(新宿)に立つてみると、交番付近で海寄りに曲がる相をみせて、枳形の痕跡を若干留めております。幻の見付跡という印象です。

国道拡幅工事以前のこの辺は、倉がたち並んでいたが、立ちのく際に、多くこわされたといえます。

今の国道ぞいにある、梅月そば屋

の倉の話です。国道拡幅以前は、母屋の裏に倉がたつていました。母屋が立ちのいて道路になると、倉が国道に面する様になつたということですから。道路の中に消滅した母屋を物語る、倉の存在でした。

余談ですが、今の浜町交番隣の松の下に、小さな社があります。納骨堂ということですが。

石黒洋品店の倉蔵さん(99歳)の話によると、「むかし、見付跡の東側は、沼地の湿地帯だった。この水を抜いて土地を造成した時、湿地帯から骨や刀などが出て来たので、納骨堂を作つて供養した。近くの人が、毎月お経をあげて供養していた」とのことです。地元の方々の、篤い仏心といわりの表出です。

今の浜町交番に、見付跡が重なる運命を思いました。双方は、治安の維持管理をつかさどる所です。昔も今も変わらない好適地を思い、偶然必然の運命を思いました。

二枚の写真は、小田原の地域変貌の過程を、巧みに把えて知らせていました。新宿の地の、中世から近世、近代、現代へと変わりゆく事象の余韻を、プロの眼でひき出し、わかりやすく伝えていました。

最後に、大木充由さん、山口貢さん、石黒栄二さん、高野肇さん、桜木達夫さん、登記所、市役所の方などのご指導、ご協力があり、その結果であることを付記します。

小田原の郷土史再発見

小田原の起りと「こゆるぎ」考

石井啓文

「小田原」という地名の謂れを記す文献は余り見られず、これと言った論述もされていない。僅かに、天保十二年(二八四)編纂の『新編相模國風土記稿』(以下『風土記』という)に、「小田原の唱も、小田留木の文字を、艸林に連書せしを、誤りしより起れりと云説あり」とある。

一、相模國「こゆるぎ」考と小田原

「こゆるぎ」と云ふ名稱は、相模國即ち神奈川県の中に、現在三箇處ある。その一つは、江の島の對岸、袂ヶ浦と七里ヶ濱の堺にある小動(コユルギ)の地であり、他は大磯町の西海岸(アザコユルギ)の地である」

と、昭和十七年発行の呉文炳・土屋憲二共著『相模國こゆるぎ』(小淘綾)考は、記している。この相模國「こゆるぎ」と、小田原「こゆるぎ」について考えてみた。

承平年中(三三三、三三六)に編纂された倭名抄では、相模國を足上・足下・餘綾・大住・愛甲・高座・鎌倉・御浦の八郡に分けていた。この餘綾郡の浜を『万葉集』(四〇〇、五五)で、「相模治乃 餘呂伎能波麻乃 麻奈胡奈須」云々と詠い、次いで延喜五年(九

〇五)か同十年頃編纂された古今和歌集で、「小與呂木の磯」と詠われた。その後、餘綾郡が淘綾郡と言われるようになり、天曆五年(五五)の後撰和歌集では「こゆるぎの磯」となるが、同集以降の和歌では地名としてではなく、「山を越える」「年を越える(経る)」という意に懸かる懸詞や枕詞として用いられている。このように平安・鎌倉時代は、現地(相模國)を訪れずに詠われたと思われる和歌も見られ、「こゆるぎ」は本来の地名とは関係なく、懸詞・枕詞として一人歩きをしていたとも言える。

また、単に「こゆるぎ」とのみ言われる場合もあるが、多くは「こゆるぎの磯」「こゆるぎの濱」、或いは「こゆるぎの巖」とか、稀に「こゆるぎの森」と使われていることもある。こうした「こゆるぎ」の由縁は、荻生徂來が、宝曆十二年(一七三二)に刊行した『南留別志』で、

「餘綾郡をゆるぎの郡とよむ事は、よろぎの轉せるなり。綾を「るぎ」とよむは、りょうの「う」のかなを朝鮮音にて「ぎ」とよむなり」と記し、冒頭に記した「相模國こゆるぎ(小

淘綾)考」では、

「淘綾はユルギと発音され、由留幾と訓せられてゐるが、淘綾がユルギと訓まれるのは、淘の字の意には水でゆりよどませて良い物と悪い物とを選び分けると云ふ意味がある。その物をゆるぎの意味を以つてゆると訓み、綾はきぬの意であるところから「き」と略して「ゆるぎ」と訓ませたものであると考えられてゐる。(中略)「よろぎ」を「ゆるぎ」と音訓するのは、百濟から相模に移住した人々の言葉使用で、「高麗」同様、朝鮮音からの發祥である」と、いう。

「こゆるぎ」が地名として再登場するのは、室町時代の文明十二年(一四八〇)、太田道灌が平安紀行で、「大磯に至り、こゆるぎの磯にて、浦風にまたしき秋は小ゆるぎの磯立ならし今日や暮なん」と詠い、次いで宗祇が、明応元年(一四九二)頃『名所方角抄』で、

「大磯・小磯とて、中間五六町あり、南は汀なり、北は野なり、富士は乾の方に見えたり、よろぎの濱、こゆるぎの磯、など、云名所あり、但小與呂伎の磯は大磯の邊云なり」云々と、してからである。

この『名所方角抄』が基になったものか、江戸時代の日記・紀行文等に名所として盛んに描かれることになる。そして、この「こゆるぎの磯」と呼ばれる地域は、延宝年間(一七三三-一七三六)に徳川光圀が編纂した『新編鎌倉志』では、

「或は腰越のこゆるぎとも云われ、或は大磯の濱を指すとも云ふ」と言い、寛政九年(一七九七)、秋里籬島によって編纂された『東海道名所圖會』は、「小餘綾磯は酒勾より大磯までの磯邊をいふなるべし。方角抄には、大磯小磯のほとりと記せり。鎌倉志には、腰越と七里ヶ濱との間を小動とあり」と、定義している。

「相模國こゆるぎ(小淘綾)考」では、「こゆるぎ」なる名稱は、個有名詞としての意義を次第に普遍化して、一時は現在の國府津邊から相模灣の海岸沿ひに鎌倉郡江の島邊までの、緩かな曲線を書く一帯の砂濱を包む臨海の丘陵地に迄「よろぎ」の名稱が稱へられたのではないであろうか。寒川村の小動は此の事實を物語るものでなければならぬ」と記しているが、本意は大磯の西海岸としている。

風土記淘綾郡の項では、「餘綾 與呂木と註す、今何れと斥すべき地なし、(中略)宗祇が「名所方角抄」には、大磯・小磯の海濱なる由、定め云へり、されど、舊くは、一所に限れる名にはあらで、總て郡中の海濱を通稱せしなるべし」として、一定の場所に限らず、郡中の海岸としている。

また、同記足柄下郡小田原の項では、小淘綾「古餘路義」を、「小田原宿のみの唱なり」とし、小田原宿は「小淘綾里」であるという。そして、

小田原浦を「小洵綾濱」といい、「今も洵綾郡より此地の海濱を、すべて小餘綾濱と呼ぶ」とある。

以上の記述から、万葉集で詠われた「餘綾(郡)の浜」に接頭語の小が付き「小餘綾の磯」となり、餘綾郡が洵綾郡と呼ばれたことにより「こゆるぎ」が生じた。しかし、平安中期頃から鎌倉時代までは、広く相模湾沿岸を詠う和歌の懸詞・枕詞として、地域とは余り関係なく用いられている。それが、室町時代になると地名として再登場し、大磯・小磯付近の磯辺を称するようになる。

そして、江戸時代に入ると、小磯付近の磯辺を称するようになる。そして、江戸時代に入ると、揺する・揺れるが、「漣の如く揺れる」等に通じ、磯・濱を形容する言葉の響きの佳さもあり、遠浅で穏やかな江の島から小田原付近の磯までを、「こゆるぎの磯」として地元の人々に称され、日記や紀行文に記されるようになったものと思われる。

二、小田原「こゆるぎ」考

風土記小田原城の項に、「小田原の唱も、小田留木の文字を、艸牀に連書せしを、誤りしより起れりと云説あり」、「小田原城の地を、往古は小洵綾山と称した」と、ある。

また、小田原の「こゆるぎ磯」は、大磯二宮付近に比べれば少ないが、道中記や紀行文にも見る事ができる。

①『東海道巡覧記』 良辰 寛延四年(一)

五(一) 孟春

山王橋 板橋州間左山王社星月夜

社井上宮三浦荒次良の靈

宮と云

山王原 此辺の海際をこゆるぎの磯と云

一色村 新田義貞社有

石橋 八ヶ村外ていねい成作様なり、一色橋といふハ是

か

②『東海道名所圖會』 秋里籬島 寛政九年(一七九七)

酒勾川「割註」小田原の北にあり。酒勾は相模川の略訓といふ、

又名鞠子川とも云。小田原と酒勾の中に山王原といふあり。星月

夜祠、井上宮あり、三浦荒次郎の

靈を祭ると云。小餘綾磯「割註」

酒勾より大磯までの磯邊をいふなるべし。方角抄には、大磯小磯の

ほとりと記せり。鎌倉志には、腰

越と七里ヶ濱との間を小動とあり。

③『甲申旅日記』 小笠原加賀守長保

文政七年(一八二四) 三月

二十日(陰) (前略) 又土橋を渡り

て松原を行けば左に大島三浦郡の

山々跡に見ゆる。行く程に長さ一

間余り幅四尺余りの石橋有り。作

り様丁寧にして、さるべき社の前

にも有りぬべき様にて、野中には

似つかはしからぬ橋なり。一色村、

右の傍に新田義貞の社あり。山王

原の海際を小ゆるぎの磯と云ふと

ぞ。山王橋は板橋にて、三十間ばかりなり。景勝よき所なり。橋を渡りて右に一つの社あり。きら／＼しく朱に塗りたり。是は山王の社、星月夜社、井上宮と云。星月夜は三浦荒次郎某の靈を祭ると聞けり。小田原の駅の木戸あり。内に入ればいと賑へる宿なり。

④『東海道・中山道道中記』 岡田屋 嘉七編 天保十年(一八三九)

○さかわ村茶屋有 ○まりこ川近年洪水にて酒勾川と一流になりて今ハなし ○さかハ川かちわた

り、冬ハ土橋かゝる近年水高く往

くわん(往還)なん義の所なり ○

一色村町はづれに橋ありながさ廿

間 ○海ぎわをこゆるぎの磯とて

名所なり

⑤『湯沢紀行』 南詢病居士(京極高門) 貞享元年(一六八四) 三月

やよひ五日(中略) 此ころの雨にて

逆和川に水いで、とまりぬれば小

田原に宿す、あけば水落なんとい

へどけふもこゆる人もみえず、こ

よひも又こ、にかりねす、伊豆の

大島やくる事はやふた月ばかりな

りといふ浜にいで、みる、海岸よ

り風いで、もえいづ、鞆の火をふ

くやうにみゆ、つくしにもあらぬ

しらぬ火なり、むかしより相州を

瀟湘となづくる事はもろこしの瀟

湘といふ所瀟と湘との水行合て海

にいでたるが絶景なりといへり、

此海辺は早川逆和川のふたつのな

がれ落あひて其末海にいづ、より

て境致彷彿たりとて来朝の名僧刀士皆詩賦をなして此所を賞す、もろこしの瀟湘にもや、まされりとなん、此やどりは梶枕ならねど波の音に夢もおどろく斗也

この内、前述の「相模國こゆるぎ考」では、小笠原加賀守長保の③『甲申旅日記』を記し、「山王原と云ふのは現在の地図で云ふと、國府津を過ぎて小田原の町へ入らうとする入口の所であつて、山王川と云ふ川が流れてゐる。この山王原の海岸を小ゆるぎの磯と云ふ事は他にその記載したものを見ない。この濱の南濱が御幸の濱であるが、小ゆるぎの濱と云ふとぞと述べてゐるのは誤聞であらう」と、言っている。

「山王原(現東町)の海岸をこゆるぎ磯」とするのは、誤聞としているが、②『東海道名所圖會』は「大磯から酒勾までの海岸」と定義している。

また、①『東海道巡覧記』の記述を見れば、小笠原長保はこの道中記を懐にしての旅と考えられ、誤聞とすれば同記の誤りとなる。しかし、風土記は小田原海岸全てを「こゆるぎ磯」としており、誤聞とは言えない。

「こゆるぎ考」の筆者は、風土記足柄下郡の項に、小田原「こゆるぎ」が記されているのを気付かなかつたのであろう。⑤湯沢紀行では、小田原の海岸を瀟湘にも劣らない絶景と賞している。

ただ、網一色から山王原までの中

世東海道は、海岸線(はまんでえ)にあったが、元和・寛永(二五三)の小田原城代近藤秀用の時、幕命で東海道を現在の国道一号線付近に移したことが判明している。このため、江戸時代は酒匂川を越えてくると、海岸線を通ることなく小田原の町を通過し早川に至るのである。

従って、日記や紀行文では、小田原風景は城下町と宿場の賑わいが描写され、小田原海岸が記されることは少なく、小田原「こゆるぎ」は決定的に旅人の目から遠ざけられたのである。

反面、小田原の喧噪を過ぎ、酒匂川を徒歩渡で越えて無事二宮・大磯の海岸に至ったとき、旅人は足の疲れを暫し忘れさせられる「こゆるぎの磯」を目にしたのである。

しかし、小田原「こゆるぎ」が風土記に記されたことにより、僅かではあるが小田原の地にも根強く伝承されていた。明治二十九年発行の、小西湖梅(正寛)編『小田原案内記』によると、

「小田原は小田を原野の間に開きたるより名づくとも云ひ、又、小由る木と書きしを誤りて小田原となりしとも云へり、小淘綾の磯は東の方大磯の辺より、西南の方伊豆国川名の崎の辺までを総称せる名なれば左もあらんか。(中略)小田原城は又小余綾城とも唱ふ」と、ある。

おそらく、小田原の劇団「こゆるぎ座」や「こゆるぎ幼稚園」、そし

て、板橋の蕎麦屋「こゆるぎ」等に命名されたのも、こうした伝承の一環と思われる。東華軒(株)の「こゆるぎ」弁当は、その包装紙に風土記に書かれた由縁を記している。

その風土記は、「小田原城の地を、往古は小淘綾山松平、其後緑尾山田城と唱へし(門川村民蔵所の古記に見ゆ)」と、記している。小田原市史別編「城郭」は、

「後北条氏以前大森氏時代の小田原城は、『相中雑志』によると、「スベテ大森寄栖庵(氏頼)城ヲ花岳城ト云ト云々。大森ノ跡ヲ城源寺(源浄土宗花岳山城源寺)ト号ス」と記し、また、「一、御鐘ノ台(谷津御鐘台であらう)、花岳の上に有り」とも云う。そして、その後も城下の地名は城源寺に附属してきた。

つまり、岩付台―花岳―城下―城源寺などの固有名詞を合せて、この地域を大森氏の早期の本拠地とする見解が、少なくとも江戸時代末、天保の頃には存在していたらしい。因みに、谷津の曹洞宗福泉寺も山号を「花嶽山」と称している。」

と、「花岳」という小田原城の地がほゞ立証されつゝ、ある。

「小淘綾山松平」「緑尾山田城」は、風土記の記述のみであるが、大森氏以前、十四世紀の地名であろう。

三、「小田原」の始まり

鎌倉時代の弘安二年(二五七)十月、箱根湯坂道を越え、酒匂に泊り鎌倉

に向った阿仏尼は、その著「十六夜日記」で小田原付近を次のように記している。

「廿八日(前略)湯坂より浦(早川)に出でて日暮かゝるに、猶とまるべき所遠し。伊豆の大島まで見渡さる、海面を、いづことか言ふと問へば、知りたる人もなし。海人の家のみぞある。

蟹の住む その里の名も白浪の寄する渚に宿や借らまし

丸子川といふ河を、いと暗くてたどり渡る。今宵は酒匂といふ所にとゞまる。明日は鎌倉へ入べしといふ也」

早川から酒匂までの間に泊る所はなく、地名を知る人もいないという。「おだわら」の地名は、この後、十四世紀に入ってから、次のような文章に見えてくる。

①某書状 筆者未詳 嘉元三年(二五五)頃か をたわら

②藤谷和歌集 冷泉為相 延慶三年(二五〇)頃か 小田原

③尊氏関東下向宿次 筆者未詳 建武二年(二三五) 小田原上山

④箱根権現遷宮写 義山 貞和二年(二四六) 小田原松原大明神

⑤上杉朝宗奉書案写 禅助 応永十二年(四四五) 小田原京極局

この内、③小田原上山、⑤小田原京極局の意味は判明しない。

④に小田原松原大明神とあるが、

現松原神社は風土記に「古ハ山王原村ノ松原ニ在リ、故此神號アリ」と

記され、場所は現在地ではなく、現東町である山王原村(当時、原方・宮方)の松原(宮方)にあったものと推定される。

この後、十五世紀の文書に、小田原関所・小田原の宿と書かれている。当時の小田原の宿や関所は何処にあったのだろうか。

現小田原市街の礎となった町作りは、北条早雲の後を継いだ二代氏綱によって、天文初年(一五三二)頃、現在地に松原神社の再建を中心と為されたように私は考えている。永正十六年(一五二六)、北条早雲が菊寿丸に宛てた所領注文状には、「おたはら・同宿のちしせん」とあるが町名の記載はない。風土記にある小田原城下十九町の初見年代を調べても、天文元年以前は確認できない。僅かに欄干橋町に「今宿は古名なるや」とあるのが、或いはと思われるのみである。因みに、街道上に隣接する山王原・網一色・板橋・井細田の各村は、天文元年以前に確認できる。

それ以前、『十六夜日記』の弘安二年(二三五)から、小田原地名初見である某書状の嘉元三年(二五五)前後までのほゞ三十年程の間に、「小田原の宿」は起ったのであろう。大永三年(一五三三)に書かれた、町田村の「願成寺再興勸進状」(願成寺文書)は、「相州西郡鞠子河足子河之中間有寺」に始まり、鞠子河(現酒匂川)と足子河(現山王川)の中間にある願成寺(現寿町三十三―二九)からの眺め

を、「今井・一色・小田原風景在目下矣」と記し、小田原は、今井・一色同様眼下に見える」と表現している。

文化は川の岸辺を中心に発達してきた人類の歴史を考えれば、当時、計画的に作られた訳ではない「小田原の宿」は、山王松原から古新宿(現浜町付近) 辺りにあったと思われる。

『皇国地誌』に山王原村の住民も「在昔ハ今ノ宅地(東町一丁目付近)ヨリ西北ヘ七町餘小田原駅古新宿ノ界ニ里民住居セリ」とある。新宿町の初見年代も天文元年以前には確認できないが、「酒匂宿(古宿) に対する新宿とも考えられる」と、小田原市文化財保護委員の内田清氏は言われている。

酒匂宿は小田原よりずっと古く、貞応二年(三三三)の海道記にはその名が見える。古新宿は街道の整備により新宿が二町に分けられたための町名であるという。

また、「小田原関所」が記された文

小田原の名産品

明治新政府は、徳川幕府の財政、経済制度を調査しているが、着手されたのは、明治十年(二七三)頃で同十九年に完成している。丁度、『皇国地誌』編纂の着手、完成した時期が似通っている。西南戦争が終結した後でなければ、江戸時代の調査が出来なかつたのであろう。

書も数点見られる。この関所は、後世の箱根関所に見られる検問を主体としたものではなく、通行税とでもいふべき関賃徴収の場所である。現青物町で東海道と甲州道が分岐している(甲州道が後北条時代以前にあったとする史料は見られないが)ことを考えると、関所は本町か宮前町付近にあつたのではないだろうか。

小田原は「小由る木」を誤読したことから起つたともいう。

山王原から古新宿の海岸も「こゆるぎの磯」と称していたことは、これまでの史料が物語っている。しかし、この「こゆるぎ磯」は、洵綾郡の磯を拡大解釈、或いは模倣から称されたとも言えそうで、それほど早い時期とは考えられない。おそらく、江戸に幕府が開かれて東海道の旅人が増え、情報交換が容易になつてからのことであろう。この「こゆるぎ」を誤読したとすると時代が符号しない。

その資料を抄録・編纂したものに『日本財政経済資料』という本がある。その中に、「諸大名献上物」というのがあり、大名毎に献上品が月別に挙げられている。

毎年恒例的に献上され、将軍家の賄いに組み入れられていたと思われる。高一万石程度では年一回ないし二回ほど、十万石になると年五、六回に及ぶ。藩によっては、金・銀・

小田原城の地「小海綾山」は、「小由留木山」と混同したものとと思われるが、固有名詞であるだけに「こゆるぎ磯」とは別の起源と考えられる。大森氏以前、谷津の城源寺付近を「小由る木山」と称し、人が住み始めた平地の山王松原から古新宿村が誤読されたことから小由留木の名称は消滅し、小田原が唱えられたと考えるのは我田引水に過ぎるのであろうか

……、年輩者にお聞きすると、小田原を「こゆるぎの里」と解釈している人が思った以上に多い。読者のご意見もお聞かせいただき、論拠を探究したいものである。

小田原地名の由来を記す確たる史料が見られない今日、「こゆるぎ」は地名由来の一つの論拠として、これまで以上に市民に伝承されても良いのではなからうか。東海道ルネッサンスを機に、小田原「こゆるぎ」が広く知悉されることを願っている。(おわり)

織物・紙・馬代と言つた物もあるが、一番多いのは食料品で、その土地の産物が献上されている。当時のこと故、日持ちのよいものや、塩物・乾物・粕漬が多く選ばれている。

小田原藩の大久保氏からは、どのような物が献上されているか挙げてみよう。

- 九月 干鰯 一合
- 九月 里芋 一箱
- 十一月 甘鯛披 一箱
- 十二月 蜜柑 一箱
- 二、八月交替
- 参勤 箱 肴
- 在着 箱 肴

といった品々であるが、当時の小田原の名産品の一端を示している。現在のそれと比較すると面白いと思われる。なお、大久保氏の献上品については、『函東会報告誌』にも掲載されている。

『新編相模国風土記稿』には、小田原宿の土産として、いろいろ「提灯・塩辛と共に、梅の産地であると記されている。

足柄下郡小田原宿、鎌倉郡玉縄領二産ス。古風土記残本ニモ当国ノ産二列ス。消梅実ハ足柄上郡上曾我村ニ産ス。……紫蘇ニテ包ミ塩蔵シ或ハ青梅ヲ粕蔵ス。

消梅実とは余り聞きなれないので辞典で調べてみると、消梅は、もち梅といわれ、梅の一品種で、実は、酸味が少なく、花、実ともアンズに似てアンズ梅とも呼ばれるとある。青梅の粕蔵や献上品となつた小梅の粕漬は、現在ではない。奈良漬けに酸味をプラスしたものかしらと連想するのだが、ピンとこない。今造られていないところを見ると、あまり口に合わない物であつたのであろうか? (南里 哲)

- 二月 粕漬鮑 一桶
- 六月 粕漬小梅 一壺

足柄地方最後の野鍛冶

古川惣平さん(77)に聞く(一)

野鍛冶は手仕事で農具の制作や修理をする昔ながらの鍛冶屋。

野鍛冶に対して、旋盤など機械を使用する鍛冶屋を機械鍛冶という。

野鍛冶

私の家は一〇〇年以上も前から鍛冶屋をやっていました。私は五代目です。金兵衛―惣兵衛―音次郎―金治―惣平と続いてきましたが、二年前、七十五歳の時廃業しました。

私は小田原商業学校(現在城東高校)を昭和十四年に卒業しました。当時学校は、藤棚のそばの、今スポーツ会館が建っているところにあり、生徒たちは、学業以外に心身の鍛練のため武道をやることを奨められていましたので、私は学校の前にあった文武館に通って柔道をやりました。卒業してからも家業である鍛冶屋を手伝いながら、夜は文武館に行って柔道の稽古を続けていました。まだ私が子供の時分には、家に小僧が二・三人いましたが、その頃になると一人もおらず、兵隊に行くまで、父親と二人で主に農家で使う

鉄、鎌、鉋などの製作や修理をやっていました。

農具の原料となる鉄は、戦争前は小田原の古田、星崎という鉄屋さんから仕入れていましたが、戦後になると東京の御徒町に沢山あった鉄専門の問屋の中の、岡安という店から仕入れるようになりました。しかし時代が変わって、農具を造る鍛冶屋が少なくなると、問屋では我々が使う鉄以外に、他のものに向いた鉄も扱うようになり、農具に合う鉄が少なくなってきたので、新潟の方から取り寄せるようになりました。砂鉄を固めた質の良い鉄で、今ではそんな上質のものは、なかなかありません。

鉄について言いますと、刃物を造るのには、その刃物に向いた鉄でないといけない。昔の日本鉄は焼いて、叩いて、延ばして、練れば練るほど粘りが出て、いい物が出るから、鉛を練るように何回も、何回もやるんです。例えば包丁を造る場合は、鉄を割ってその間に鋼を挟んで、叩いて、叩いて、形に延ばして製品に

するから、細くても丈夫でよいものが出来ました。使い込んでいくうちに、鉄の部分は鋼より柔らかいから次第に減って刃が薄くなり、鋼の硬いところだけが残っていつまでも良く切れる、刃がこぼれるような事はありません。また、鋼が入っているのは刃のところだけです。柄に差し込む部分は鉄だけで厚く造れませんが、柄の中の鉄は錆びてくるので、その部分を溶接して柄を時々取り替えては何年でも使えます。うちでは三十年も使っています。しかし今ではリキ材と言って、すでに鉄と鉄の間に鋼が挟み込んである物が出来ていて、包丁の形に作ればいいようになっているので、手間はかからず簡単ですが、刃の部分も、柄の中に差し込まれる部分も硬さが同じなので、乱暴に扱うとそこからぼきんと折れてしまうことがあります。ステンレスの包丁も多く出まわっていますが、これも硬さが全部同じで、刃が付いているときはよく切れるけれど、だんだんに切れ味が鈍ってきます。昔は一本の包丁を造るのにも大変な手間がかかったものです。だからこそ、それだけ使いやすくていい物が出来たわけですね。

鍛冶屋に弟子入りして、初めにやらせてもらえる仕事は仕上げです。ヤスリのかけ方をおぼえたり、刃をつけたり、出来た物を磨いたり、易しい仕事から入ります。見よう見ま

ねで腕を鍛え、馴れるに従って、先手といって槌を使って親方と二人一組で仕事をするようになります。親方の座るところを横座よこざといい、先手は大きい槌を親方の指図に従って振り下ろし鉄を鍛えていきます。こうして何年もかかって仕事を覚え、腕が上ると横座に座れるようになります。ですが、職人はこれでいいということとはなく、一生が修行です。しかし、若い人達が戦争に行き人手が足りなくなると、鉄を鍛造するため先手の代わりにハンマー機械を使う所も出てきました。元来野鍛冶の仕事は粗打あらうちの時だけハンマーを使えば、あとは一人で出来るものなのです。うちにもハンマー機械がありました。が、人手があるうちは先手を使っていました。戦後は方々の店で人手不足のためハンマー機械を使用し、親方一人で仕事をこなす所が増えてきました。

鍛冶屋は仕事で使う道具はみな自分達で造ります。金槌、たがね、火箸なども、自分が使いやすいように造ります。聞いた話ですけれど、昔、正月十七・十八日の飯泉観音の達磨市だまろしの時、お詣りに来る人が皆店の前を通るので、いろいろに使う、五徳ごとくや火箸などを沢山造って並べて売つたら、お土産に買って帰る人が大勢いて、上から吊した味噌こしぎる一杯の売り上げがあったとのこと、文久銭の頃の話です。



作業場にて 昭和52年

岐阜県の大垣に、「南宮大社」といって、鍛冶屋とか鉞山など、火を使う仕事をしている人達の信仰を集めている神社があります。そこを金山様と言って、うちには「金山大権現」の掛け軸があり、毎年十一月八日の禰祭には掛け軸をかけ、御神酒をあげてお祀りしたものです。

昭和二十八・九年頃だと思いますが、その南宮大社へ鉞を奉納に行ったことがあります。小田原の鍛冶屋の組合の人達が集まって、それぞれがひと叩き、ふた叩きして仕上げ、その鉞を額に入れ、東海道線に乗ってみんなで持って行きました。勿論鉞の刃の部分ですが、良く磨いて奉納金をつけてお供えしました。額は暫くの間神社に掛けられていましたが、そのうちに取り外されてしまったようです。鉞の柄は近くの高田さんに頼んでいました。高田さんは棒屋といって、鉞や鋤等、農具の柄を専門に造っていました。

農具の値段は、仲間達にもわからないうちに、うちだけで通じる符丁を使っていました。1ーア、2ーキ、3ーナ、4ーイ、5ース、6ーエ、7ーヒ、8ーロ、9ークと決めてあり、アキは12、ナスは35といった具合です。この符丁は「あきないすえひろく」となり、覚え易かったです。これはあくまでも個人の符丁で、商人達は各人がそれぞれ符丁を持っています。

た。しかしこれも昔のこと、私の頃は公定価格が決まっていたので、符丁も必要でなくなりました。昔の物の値段は、よく当時のお米の値段と比較されますが、農具の値段は、そのバランスでは今も昔もあまり変わりないと思います。

鍛冶屋は一年中、火を使っているので、火傷をすることが多かった。大した火傷ではないけれど常に火の粉が飛んでくる、それもどこへ飛ぶか分からない。右手は槌を持って叩いているからそれ程ではないけれど、左手は材料を押さえているから火の粉が落ちて払うことが出来ず、小さい火傷はしょっちゅうで、今でも腕にその痕が沢山残っています。

当時鍛冶屋は、作業用として特別な物を着ていたわけではなく、比較的燃えにくい木綿で出来た普段着の仕事をしていました。ですからズボン等は直ぐに穴だらけになってしまっています。足は足袋に草履はきでしたので、ブリキで足カバを造って火傷を防ぐようにしていました。火傷の薬としては、「馬の油」を使いました。ワセリンのような感じで缶に入っており、火の粉が飛んだくらいに小さな火傷の特効薬で、水ぶくれにならない、化膿しないなどの効果があり、常備されていました。勿論大火傷をしてしまったら、こんなものでは間に合いませんが。

燃料は松炭でした。刃物作りには炭素分が多い炭を使った方が良い刃物が出るので、コークスよりも炭の方が良いとされてきました。昔は伊豆半島の西側のつけ根の辺から修善寺あたりにかけて松山が沢山あって、松炭を焼いていましたので、炭俵をトラック一台分づつ買っていました。比較的安かったし、炭素分も多いし、やわらかいので火が付き易かったから、灰が立ったり、火の粉が飛んだりするマイナス部分を差し引いても、コークスより良かったんです。でもだんだん松炭が不足してきて、コークスを使うようになってきました。コークスは硬くて、火をおこすのが大変でした。

昭和五十六年二月一日、小田原の中央公民館が落成した時に職人展が開かれました。市内の職人さん達が腕を振るった製品を出品し、私も鉞を出品しました。市役所の方が家まで来て撮ってくれた、私が仕事をしている時の写真も一緒に飾られました。昔は井細田には十三軒の鍛冶屋があり、皆忙しく仕事をしていましたが、時代が変わり、一軒減り、二軒減りして、うちが最後の鍛冶屋になってしまいました。うちも二年前に止めてしまいましたので、この写真は大事な記念になりました。

(聞き手 早川初枝)

(つづく)

懐かしの地をたずねて

武田敏治

日本の敗色が濃くなってきた太平洋戦争末期のことである。

昭和二十年(元翌)三月、硫黄島が死闘の末玉砕、米軍の手中に陥ると急拠空軍基地がつくられ、B29による空爆が中小都市を含め急速に拡大していった。

戦局は益々激烈の度を加え、米軍の本土侵攻が間近かに迫ってきたと感ずるようになったのもその頃である。

連日の空襲の最中であつて、中学校(旧制)の上級生は軍需工場へ動員、下級生と国民学校高等科の生徒は威張山、舟原、石垣山等の軍作業に出動、事態は緊迫していった。

小田原周辺の山村地帯では、本土決戦の準備が着々とすすんでいた。その追いつめられた状況にあつて久野・坊所の父の実家、星野家(祖父定吉)の存在はいかに心強かつたことか、大勢の兄弟とその身内、甥、姪に至るまで、物心両面にわたつてその恩情にすがつたの言うまでもない。

終戦前後の食料や物資が欠乏して困窮した時代に、無事、乗り切れた有り難みが時を重ねるごとに身にしみてくる。平塚が空襲で全滅、次は小田原が危いと言われたのは、昭和二十年七月の夏休みに入る前だった。

立川飛行機製作所小田原工場(現城東高校敷地)徴用で働いていた三十七歳の父、良作と新玉国民学校五年生の私は家に残つたが、三十五歳の身重の母イトと四人の弟妹は、足に障害の

あつた伯母鈴木その(母の姉当時四十二歳)と一緒に父の実家へ疎開した。

そして、裏山の竹やぶの一隅に母の実家、新宿の鈴木綿店の物置小屋を解体し建て替え、暮らすことになつた。

小屋は、祖父、健之助(当時六十五歳)と叔父栄次(当時二十八歳)、父の三人でとり壊した。長男の義雄叔父(当時三十二歳)は応召して家にはいなかった。

その古材は、当時、親戚関係になつた上幸田の松の湯(現お堀端通り松琴楼から大八車を借り、何回も往復して運んだ。結婚前の母の二人の妹と私が、車の後押しをしながら久野の坂道を登つていった。

当時の道路は、今では想像もできぬ石ころだらけのでこぼこ道だった。途中、空からの攻撃も油断できなかった。

留場の出口橋の附近だった。不意に襲ってきた艦載機の機銃掃射に、必死の思いで道端の稲むらの陰に隠れたことがある。実家から裏山の竹やぶまでは、道



疎開小屋を建てた竹藪のあと

幅も狭く木材を肩に担いで運んだ。時々、懇意にしていた新宿の棟梁鈴木要作さんが見てくれたこともあつて、どうにか住めるようになった。

伯母は、毎晩空襲のたびごとに、リヤカーで城趾公園や海岸へ避難していたが、安心できる場所に落ちつきほつと安堵の胸をなで下したにちがいない。

私も泊りにいくことはあつたが、連日の空襲警報から逃れるより、近くの大川(山王川の上流)で鮎釣りを楽しむことが多かった。土手の改修にも手が回らなかつた時代、谷川の流れは都会から疎開でやってきた子



久野坊所

どもたちにとつても、格好の遊び場だった。
小屋の周囲は林に囲まれて、B29の爆音は時々聞えても空襲の心配はなかった。

少し離れたところで、陣地構築の軍の動きはあるものの、蟬の鳴き声が聞えるだけで、今どきの山荘のようだった。

自分だけ、こんな安全なところへ来ていて良いのかと、残った家族への気づかいが、当時綴った伯母の日記にも滲みでている。

右下のなだらかな場所が、小屋を建てた竹やぶの跡である。



塹壕跡

左側の水路はわさび田であった。近くに水神様という水源地があり、貴重な生活用水の源として、部落の人たちの暮らしを支えてきた。

この湧水は実家の地所内にあり、旧くは弘法大師の伝説をもつ柳ノ水と呼ばれていた。

この柳の水については『新編相模國風土記稿』に「坊所(波宇度吉呂)の山間より出る清水あり。幅三四尺、久旱にも水涸ることなし。源に枯柳あり。相伝ふ弘法大師の手植なり」と。故に里俗柳の水と呼」と記されているが、実家では、その水を利用して、江戸時代の末期、農作のあい間に酒造りを営んでいた。銘柄の「柳川」

は柳の水に因んで付けたと伝えられている。残念なことに明治の初年、部落に疫病が蔓延、酒造りは断絶せざるを得なかったという、その蔵は、相田酒造に移り今日でも往時を偲ぶかのよう息づいている。

父が昭和七年(二五三)、父は修業した藤沢の石井呉服店の年期が明け、現在地に創業した時、屋号を実家の「柳川」の一文字をとり「柳屋」としたのは、そこに由来する。

その水が、建てた小屋の前のわさび田に滝のように落ち、飲料水には不自由しなかった。今では、竹やぶ



塹壕前の杉林

一〇〇米ほど登ったところに、旧陸軍の陣地跡がそのまま残っていた。
奥の方は暗く、抜け道もあるらしいが、大きな洞穴という感じだった。

従兄弟の語るところによると、その壕は本土上陸作戦で攻めてくる米軍を迎え撃つ大砲を備えつける塹壕だった。

構築中の軍隊も食糧不足で飢餓状態、農家でさえ事情は逼迫していたが、食物を貰いに来る兵士には家族の分を減らしても、援助しやうとしたという。

そのような悪条件を克服しながら構築された陣地も、若し終戦の日がもう二、三ヵ月先延しになっていたら、米軍の艦砲射撃の一発であとかたなく吹っ飛んでいたことだろう。

安全な場所と選んで竹やぶの片隅に建てた小屋も、伯母も母も弟妹も、塹壕と共に一瞬のうちに消え失せていたかも知れない。

そして、小田原も焦土と化して生き残れた市民はいたのだろうか。移りゆく時代に取り残された陣地跡は、冬の陽ざしも杉の小枝にさえ

ぎられて届かず、激動の昭和史を背負って虚しく辛苦のあとを物語っているように感じた。

中村原郷

①

遠藤次郎

一つ目小僧

七十年位前、老婆が十二月八日は一つ目小僧が山からやって来るから、夕方早く家に帰りなと言われた。「一つ目小僧が山からやって来る」と歌いながら帰ったら、家の門口に四、五米の青竹に背負い籠が結んで立っていた。一つ目小僧が家の中に入って悪さをしたためだと聞かされた。近年はこんな話が失なわれて、子供の頃から勉強くんと押しつける。私の俳句の師で故人となられた、立木望隆先生は、よく「現代社会は物々金々で、あの日本人の精神がなくなつて物悲しい」と、いつも言つて居られた。

森の狐

道祖神の前から西へ五、六十米下ると、小川に出る。

右へ曲つて堤を進む。堰がある。「どんどん」と村人が言う。水音が春を告げる。

堤の右側は田圃。盛りを過ぎたなすが見える。少し進むと二本の丸太橋が掛かつていてその向いに八幡森が見え大櫓が天に迫る。

更に進むと二番目の堰が眞砂に通ずる土橋が掛かつていて車がやつと通れる程である。右側は広々と田圃で、川辺には岸が群生し、猫柳の花が満開で、畦にはいたどりの眞紅の芽生が美しい。月遅れの雛祭りに招かれて広濟寺の前の丸太橋を渡ると生家である。夕ぐれて、ご馳走を重箱に詰めてくれた。二本柱の火の見の下の家に戻り開けて見る。

中が空っぽ森の狐に取られた。取れなかつた時、雨戸を「トントン」叩く又ついで来たなど言つて稲荷寿司を二つ三つ投げてやる。立ち去つて行く様子だ。

こんな話を老婆に聞かされてもう六十数年が過ぎた。

中村川水車跡地 中村原九二五番地先



水車の由来

今から二百三十年程前、西国の車大工が、早川庄に来て水車小屋を建てたそうである(『飯泉誌』勝福寺蔵。以来中村庄に来て水車小屋を造つた。中村原だけでも、上ノ久保に橋川家、関山家、更に小澤浅五郎家。御嶽下には多田家、加藤家。下りにはエース光学の敷地内に飯田和家の先祖と飯田昭二

家の先祖、田代文男さん宅の下当りに小澤家、田代家と、数多くの水車があったと聞いている。川勾の善波さんの水車もあった。

押切の浜は、

急に深くなつていて三十石船が着いた。米・大麦・小麦等をつき挽きして小舟で船に運んだ。江戸に運んで帰り船で物産を積んで帰つた。中村原は、大工業地帯で当時は鱒漁も豊漁で、茶屋が数軒も有つて漁師の若者が始め多くの人が集つて二宮、国府津の村より栄えていたと、古老に聞いたことが昨日のように思い出される。

水車については後日詳細について記したい。

下原ノ橋

昭和十年(一九三五)の大洪水は、中井地方も大被害が起きた。中井醤油屋が流失した。田畑も流され当時は水車が各所に有つて、堰の關係で川底が今より三、四米も浅く、その時立派なコンクリートの下原橋が流失。当分は仮の板橋次のコ

ンクリートの橋が出来たのは記憶にない。昭和三十六年また大洪水。この橋も流失し、上ノ久保の部落は完全に孤立した。何日か過ぎて仮の木橋を掛ける。村相談がまとまり、仮橋の工事に村の土木職人はもとより、消防団の出動と言う事に決つた。難工事が予想される小生三十六歳で分団長、団員の無事を祈つた。工事は真中に鳥居を立て両側より電柱を渡す。電柱は払下げか両方より三本づつ掛ける。

無事夕方頃には厚さ三寸程の板を並べてリヤカーが通れる橋が完成してほつとした。今の下原橋はピーヤのない鉄筋の三代目の橋となつた。

下原の辨天様

大正の始めの頃。近年にない大旱り。村人は困り果てて、辨天様を下河原に運び四方に笹竹を立て注連を飾り、神官をお願いして雨乞を行った。すると一天俄にかき曇り喜びの雨がどつと降り出した。村人は喜んで酒盛を始めた。川上に降つた雨が凄まじく、あれよあれよと言う間に辨天様

が押し流されてしまった。二、三日して川水が引いたので、村人が總出で捜した。が砂に埋れたか押切の浜に沈んだか見当らない。

仕方なく石工にお願いして、次代の辨天様を造って祀ったそうである。

辨天様は、現在上ノ久保の禪龍寺の池を配した境内の丘に祀つてある。

早や八十余年前の出来ごとになる。

辨天様の使いの蛇については後記致したい。

性の神

今から七十年前、私は曾

我大澤から下原の叔母の家に養子として連れてこられた。下曾我の駅で発車しようとするときだった。兄が自転車で急ぎ来て私の左手を固く握つてつれ戻そうとした。私が痛いと言つたので兄は手を離れた。寒い小雪の舞う別れであった。下原の家は雑貨と菓子酒等を売っていた。

実家の父は、肋骨カリエスで沼津の病院に入院。残された家族は、兄は母が茹でたてのうどん、そば、を自転車で下曾我の村中を売り歩く。母は朝四時に起き、水車を廻して米、大麦、粉

を挽き姉二人は熱海の旅館に奉公に行った。兄は孝行者として新聞に載つたとか。下曾我の正栄堂の店主先代が孝行者として兄に緋の着物を着せてくれたと聞いている。下原へ来て間もなく一月の十四日に家の下の辻で盛大にどんど焼きが行なわれた。

禪龍寺の由来

故人になられた郷土史家竹見龍雄先生の話しでは、

数百年前に中村庄司平小太郎憲平の草庵が起りとか。昭和三十五年の寺の建設の話が出て、当時檀家の戸数は二十六戸、積立金が二十九万余円あるから副総代の武井憲太郎さんが、私に設計と小林材木店にかけ合いを一任された。約十八坪程の平面図を書いていったら、この金額では足りないから裏山にある杉三十数本を切つて運んで来なさいと言われた。話を持ち帰って総会に計り協議が出来、檀家の人が総出で数日かかって運んで寺が完成しました。

昭和四十四年に墓地の整理の話が出て早速工事に着工、総出で土の運搬をして整地して現在の新墓地「東側」となった。通路に当る家は移転と決り、多くの家の墓地が移転した。詳細は後日に平成九年に六十何軒かの檀家の人の寄附で今の間口七間半奥行五間半の立派な寺が完成しました。尽力をした一人として想い出に残ることである。

登校道

昔、廣濟寺の鐘楼櫓が大門の入口に有つたと古老の

話である。大昔、大きな台風があつて、鐘が飛ばされて、今のセブンイレブンの裏の底なしの沼に大鐘が沈んだ。しかし、見当らないので、いつしか金數と言う地名になつたと云う。公園上は小字金山である。

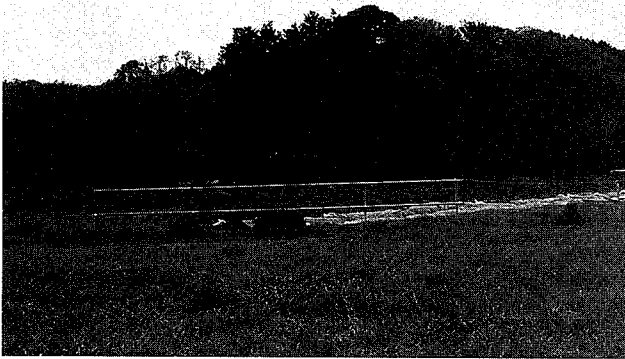
そこから白鬚神社に向う旧道に進む両側は、広々とした島で、桑や煙草が植えられていて、麦秋には一面の黄色の畑となつた。島の真中に、伝染病が発生した時に患者を隔離する避病舎があつた。昔は冬になると、雪がよく降つて子供の腰の深さまで積もつたものだ。途中数軒の家があるだけだった。小学校の校門の両側に桜の大樹が満開となつた。校舎は木造の平屋で三棟が別れて建つていた。三教室の中の仕切戸を取り払つて無声映画が上演されたことがある。それを見て子供心にロケットで宇宙に飛び立つ想いで感動した記憶がある。私の家は、小商いをしていたので店番をするため、駆け足で廣濟寺の裏を通り小川の堤の近道を帰つた。

筆者住所

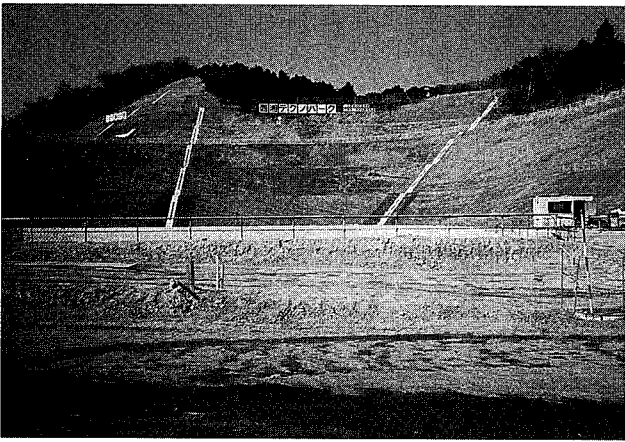
小田原市中村原四一八

〒256-0803

☎〇四六五(43)三五〇四



工業団地造成予定地 手前は中村原 平成5年4月



あたりの光景一変 工業団地造成中 平成11年12月

さかわ 酒匂史談 ④

かわせはやお 川瀬速雄

三郷名

①神酒説

②川水逆流説 東海道側の民家の前に、幅三尺ばかりの溝があり、この水が西へ逆流する故地名となった。これも信憑性がない。

(以上前号)

③地形説 藤原物茂卿の『南留別志』に、岸和田、岩和田、佐川田などの地名に、わだとあるのは、曲の字の意味で、海に接する川が曲がついているためと思われる。これも酒匂川が海に注ぐところで、地形が湾曲している。それに、酒匂の匂の字は、句の俗字で、注釈に句なりとある。また、『漢書趙充国伝』に「入鮮水北句廉上」註に「句廉謂水岸曲而稜」(鮮水

廉稜Ⅱかど)とあるのは、もとは水岸の曲がついているのに用いられ、「さかわだ」という

ところを、「だ」を略してたと解される。

以上は、『新編相模国風土記稿』の記すあらましであるが、私は④に人名説を付け加えたい。

『正倉院封戸交易帳』の天平七年(七三五)十一月十日付けで、相模国掾として正六位上行掾勲十二等、酒波人麿が現地の実務官として登用された。この酒波人麿の住んでいた所なので、酒波という地名になったのでは無かるうか。

土地の有力者が、その地の名を自分の姓にする例もあるが……。

では、次に村名の当て字について、どのようなものがあるか纏めてみよう。

- 1 酒匂―現在(私の小学)校卒業証書は酒匂)
- 2 酒波―酒波人麿
- 3 酒匂―『吾妻鏡』その他多数(最近まで主要)

- 4 逆川―『海道記』に道は順なれど宿を逆川

と云う所に宿る

- 5 酒輪―『箱根権現縁起』に鳥羽法王酒輪郷四十八丁歩箱根権現に寄進
- 6 佐河―『曾我物語』に兄弟工藤をねらい佐河宿を初め大磯小磯云

- 7 逆和―『源平盛衰記』に佐々木高綱十七騎にて相模川を打渡り大磯小磯逆和湯本足柄越えて云々
- 8 坂勾―『管窺武鑑』に信玄鞠川を前に坂の勾に陣取り云々
- 9 さかわ―『十六夜日記』に丸子川と云う川をいと暗くたどり渡る。今宵はさかわと云うところにとどまる

- 10 神奈川―『皇国地誌』(酒匂村誌)は、「里程」について管轄庁迄を先ず挙げている。寅十度 神奈川県庁へ 十四里四町四十七間 三尺
- 申六度 小田原市庁へ 二十八町四十五間 三尺

- 11 酒匂村の元標は、明治八年(一八七五)六月五日付、公達に基づいて設置された。小田原市内百カ村前後、旧村二十八、総てに里程の起点を定め、土地寮に提出された。
- 元標は、各村の中央もしくは重要な地点に置かれた。酒匂の元標は、酒匂字南川端一九番地、一号国道より本典寺に入る路上にあったが、いま、道路が舗装されて見えない。

- 12 『皇国地誌』(酒匂村誌)は、「里程」について管轄庁迄を先ず挙げている。寅十度 神奈川県庁へ 十四里四町四十七間 三尺
- 申六度 小田原市庁へ 二十八町四十五間 三尺

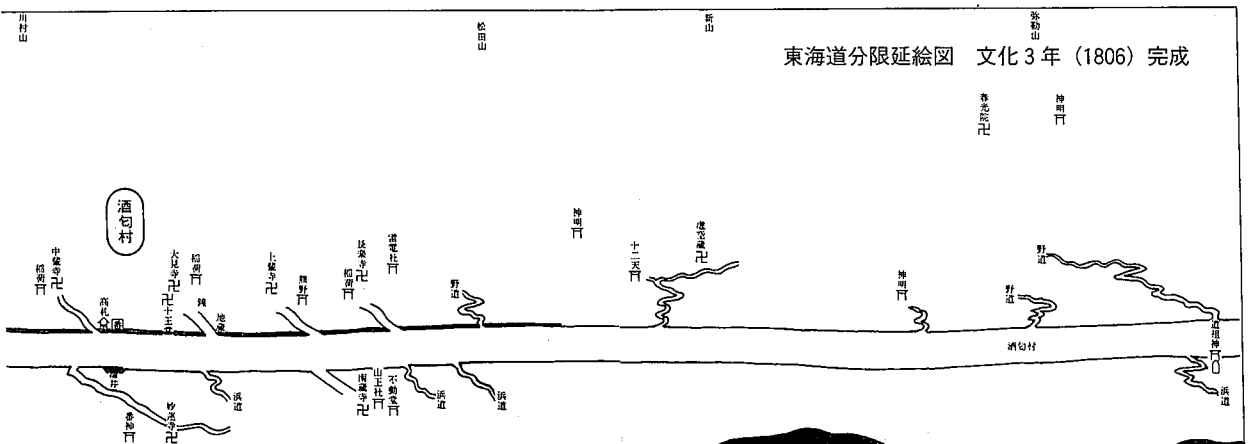
- 13 次にな傍駅市と四隣の村々を記している。
- 14 近傍駅市 寅九度 洵綾郡東海道大磯駅元標へ三里十三町二十二間
- 15 未十三度 伊豆加茂郡熱海村元標へ七里二十九町七間三尺
- 16 四隣 寅の方 小八幡元標へ十五町四十間

- 17 『字源』によると、酒と云う字ハ、シ(水)と酉(つぼ)の合字である。③の地形説により酒の字を選出したのかも知れない。

- 18 四位置 日本列島の中央、太平洋海岸・足柄平野に位し、江戸より行程十九里十町許。酒匂川の中流を、網一色との分界となす。

と云う所を、「だ」を略してたと解される。

東海道分限延絵図 文化3年(1806)完成



露国・日露の役俘虜のこと(17)

八十七年ぶりのお礼 後編(13)

内田善作記 「日露戦役従軍記録書簡往来」
吉田雪子編

故・隠岐威重

七 生存して居た事が判明

第三軍指令部付衛兵騎兵一等

兵・酒井治三郎氏(金手村)よ

り同氏の実家へ

三月七日 服務中捕われ赤十字病

院に入院収容せられ、厚き治療を受

け居り候間、決して心配無用、次に

小田原翁屋内田善作なる者も同室に

おり候に付一寸知らしてやり下さ

い。私の傷は頭と右の中指などと、

刀傷でもはや大丈夫。

内田は両足なれど、いずれも快方

に向かいおり候

三月十四日 ハルピン
(電報仮名文) 六月三日酒井家着

内田善作より奥津又兵衛様

(善作の実父・狩野)

先日小田原へも手紙を出しておき
ましたが、私の傷も直りましたから
必ず心配には及びません。唯退屈し
ております。食物はパン、ソップ、

牛乳、卵、牛肉、米等を食べており
ます。返事の手紙はいりません。煙
草も沢山わたります。

四月七日 ハルピン赤十字病院

内田善作

松隈善旗氏より

内田善作殿

今此処に計らずも通信をせざるべ
からざる場合になりました。さて、
本年三月九日奉天会戦より行方不明
となるを以て御宅は勿論親戚一同心
配し出来るだけの手をつくして、戦
地は言うに及ばず病院までも尋ねた
れども分からず、只今行方不明と言
う通知が前川の椎野宅より来たり。

又傷を受けたるとき捕われたといっ
て、塹壕に來たりしを見たと言う者
あり、如何ともするあたわずの処、
去る六月三日に金手、酒井宅よりハ
ルピンに居ると言う通知あり、その

手紙三月二十四日付なり。傷を受け
て捕へられたるは決して恥じる処は
ない。手紙送れ。この手紙が着く前

に、よきこと有るならん。其の地に
おるうちに、十数年後の事を考えて、
よくよく気をつけられよ。身体を大
切にせよ。内は皆変わりなし、安心
せよ。

明治三十八年六月十二日

(電報仮名文)

奥津又兵衛氏より

内田重兵衛様御家内御中

拜啓 過日は参上仕り種々御馳走
様相成り候事有り難く深謝奉候。

陳者、拙者去る九日、出京仕る序な
がら俘虜情報局へ出頭仕り、送金の
手続き依頼申し候処、内田は未だ露

国より報知之無候間、取扱い兼ね候
由申し候間、酒井様の書面の写し持
参致し居り候に付、出し候処、是な

れば確かだらうと御取り扱い下され
候間、少々と依頼仕り候。右に付、
貴家族御思召し之有り候はば此の処

少々間之有り候方然る可くと存じ候
に付、延引ながら一寸申し上げ候。

吾は情報局の親切なるは実に恐れ入
り候。

何なりと送付候物之有り候はば遠慮
無く当局に届け出可き様申し候。御

都合も之有る可くと候間一寸御案内
申し上げ候。余は書面万々申し上げ
候也。

明治三十八年六月十八日

内田重兵衛より

内田善作殿

拜啓 酒井殿よりの手紙三月二十四
日付け六月四日まさに着。
其の許には三月九日の戦闘の際、両
足負傷して捕われ、今赤十字病院へ
収容せられ厚き治療を受けられる
由。旅団、中隊、戦友より皆行方不
明の事にて、長らく其本の通信なき
故心配一方ならず案じ居るうち、ふ
と酒井殿より御知らせ下されて、命
有る由、家内親戚一同大いに喜び、
一先ず安心致しました。

其本には負傷故の捕虜なれば決し
て恥じるには及ばず故、身体大切に
するが第一なり。

いま日本国へ帰られん気もあらば楽
しく待たれよ。宅親戚も皆無異故必
ず心配せぬよう。

手紙は出すべし。皆機待つ。宅、狩
野より送りたる金子もみな戻り候間

さぞ不自由察し居る。余は再び面会
を待つのみ。酒井殿の宅にても

皆さん無事故宜しく申し告げべく
候。金子は直ぐ後便にて送る、待つ
べし。

六月二十日 内田 父

(電報仮名文)

後備歩兵第一連隊第四中隊事務

室歩兵曹長村上仁三郎殿より

内田重兵衛殿

拜呈 六月九日付御書面着。拝読

仕り候処貴息善作殿には大会戦の際

両足に負傷なし敵手に収容せられ目

下ハルピン病院に治療中、亦傷所も御全快の由、欣喜の至りに御座候。付ては右の状況御通知に相成り候、戦友酒井治三郎君は同部隊に之有り候也。尚又何れに因て御承知に相成り候や大至急を要し確実なる御回答相成り度此段照会に及び候也。

七月十四日

後備歩兵第一連隊副官

江田春彦氏より

内田重兵衛殿

補充兵一等卒内田善作

右者、当隊編入の処、去る三月九

日奉天省田義屯付近の戦闘の際生死不明となりその後百方搜索を遂げたるも更に判明不致候処、此度貴殿より去る六月二十九日付を以て当旅団

長隠岐閣下に宛て御通知相成候、その文面拜読致し候処、善作氏の戦友

酒井治三郎なる者よりの通知により善作氏は露軍為捕虜となり、目下ハ

ルピン病院に収容されつつある趣に付同戦友酒井治三郎なる者を取り調

べの必要之有るに付、当隊を悉皆取り調べたるも酒井なる者は編成以來

編入せしこと之無く、依つて取り扱

い上差し支えを生じ候に付、貴殿に宛て捕虜の云々を通知せし酒井治三

郎なる者は何れの地点よりその通知せしや、又同隊に所属し居る者なる

や且つ目下何地に居属するや、至急御回答を煩わし度、又善作氏の同戦友酒井治三郎より貴殿に宛て發送したる書簡の写しにても宜しく候間、その封筒共全部御写し取りの上、至急当本部へ御送付相成り度、その結果内田善作氏の消息分かり候はばその手続きを致すべく候。ご承知相成り度。此段照会に及び候也。

明治三十八年七月十八日

生死不明者判明通報

明治三十八年三月九日於清国盛京

省田義屯付近戦闘の際生死不明の処、本人は該戦闘の際、負傷の為露

国軍に収容せられ目下ハルピン病院に現存と判明。

神奈川県足柄下郡小田原町十字二丁目五百十番地 平民

後備歩兵第一連隊第四中隊補充兵陸軍歩兵一等卒 内田善作

明治三十八年九月十六日 横濱連隊区司令官

内田はま殿

ハルピン病院を退院

モスコイの病院へ

ハルピンの病院に居る事数十余日、四月二十七日愈々ハルピン病院

を退院して赤十字車に乗車す。然れども直ちに発車せず深更に至りて発

車す。途中原野にして別に見るべきものなし。只停車場に人家四、五あ

るのみ。

五月八日ヨルクッカという停車場に夕刻着車す。

註 ヨルクッカとはイルクーツクの事ならん。

途中バイカル湖と言う大なる湖あり。一帯氷を以て張り詰め水の動揺

するを見ず。停車すること三日間。五月十一日夜に至りてヨルクッカを

発車す。但し三日間停車せしは乗り換えをなす為なり。五月十八日正午

ホーラツウニカラエフ停車場に着く。

五月二十一日夕刻ゴローチャピンツケ停車場に着す。これよりウラル

山脈あり。夜に至りて漸く経過す。五月二十二日午後四時スイミ、スケ

エン停車場に着す。五月二十二日午後十二時ファン停車場に着す。

五月二十四日午後二時ホーラツマールラ停車場に着す。此の停車場の

ある所は湖水の大なるものありて、汽船の便あり。且つ又納涼には至極

適当と見え、小舟に乗りて、夫婦相携え遊び居るを見る。又大なる鉄橋

ありて風景絶佳なり。五月二十五日午前四時セースラリン停車場に着す。五月二十六日午後

三時サーソー停車場に着す。五月二十七日朝ムヤブザビル停車場に着す。

五月二十七日正午ダーチー停車場に着す。此の停車場のある所はペテル

ボルグ行とハリコ行との十字型の鉄道あり且つ又此の地は夏期にいたれ

ばモスコイの有力家の納涼地にして家屋の構造並に風景絶佳なり。

ダーチーとモスコイとは凡そ三里程離れた所なり。五月二十七日午後

二時モスコイ停車場に着す。それより馬車にて病院に至る途中沿道見る

人の山を築き、家屋は広大にして佳なり。電気鉄道の設あり。複線にし

て客車の構造は内地と同様の如く見ゆれども、客車の屋根に手懸を造り

て客を乗せ、又運転手の居る所は前面を硝子板を以て全部造り塵を除け

る等は極めて好都合なり。又夏期は客の腰を掛ける所には網を以て造り

空気の流通を宜しくする等も極めて好都合なり。

註 遠路はるばる極東の地から送られて来た負傷の俘虜だが、モスクワ

の市電、館物等も感心して眺めているのは微笑ましい。シベリヤ鉄道の

旅(4/27~5/27 一ヶ月)の扱

いも良かったのだろう。行くこと一里ばかりにて愈々病院

に着す。時に午後四時なりき。病室に入るや病床の設備なくして

その儘にて一眠す。暫にして準備調いたるを以て服を着替えたり。実に

不整理には困却せり。当病院に入院せし日本人は百五十一

名なり。六月三日に至り最早全快せし者あるを以て午後六時、半数は馬車にてメジメジという日本捕虜収容所に出発す。

酒匂上輩寺三十四世桜沢堂山の研究(三)

谷口得二

この記録(遊行藤沢両御歴代系譜)によれば、傾心上人の巡錫は二回行なわれていたが初回は赴越しておらず、二回目の巡錫中に越後で入寂されて江戸への帰着は遂げられず、従って、もし種清が傾心上人と共に江戸、又は藤沢に帰り得たとするならば、どうしても初度の廻国時に、即、文政十一年(一八二八)八月帰任の折しかないのである。しかしこれはどのように中広く理解しようとしても西国の遍歴であって、越後へは行っていない筈であり、それ故にこそ二回目にして始めて訪越したとみられるのである。この故に、もし種清が十五歳頃迄に傾心上人と越後で会ったとしても、ともに江戸へ帰り得ることは、決してあり得なかったのである。斯くて、河竹繁俊調査の幼少期における信憑性の一角がくずれると、この期の記述は多分に全くの虚構と受容せざるを得ないことになる。

また仮りに傾心上人の前の遊行五十五代一空上人の行跡をとり上げてみても、文化九年(一八三三)三月十八日遊行五十五代相統、遊行四年で、文化十二年五月廿九日但馬九日市西光寺で入寂して、種清以前の存在で

あるし、つぎに傾心上人の後の遊行五十七代一念上人にしても、嘉永元年(一八二〇)三月十八日遊行相統賦算同年五月十一日、御朱印頂戴後関東修行、奥羽松前巡行といふ布教で、年代的に考えても、彼とは無縁の両上人である。

かくして、種清の出生についても河竹調査の記録は誤伝又は誤聞として処理し、上記会本序文に示されているような、母方祖父の江戸在住の記載からしても、さらに後年の戸籍より察知しても、多分に江戸出生説の妥当性が浮び上ってくる。

しかもそれを傍證する別の証拠を確めたのである。上輩寺の前住六郷信明夫人ひで女の遺された口述は重要な点を包含している。ひで夫人の入嫁は、昭和三年(一九二八)で、当時この上輩寺には先住六郷弘純氏がいたが、あの関東大震災から受けた災禍のま、で仮屋の庫裡に老いを養っていた。この弘純については、

それだけに堂山のことはよく知っていたことは疑いない。この弘純和尚が遷化の昭和八年五月、後住になる若い、ひで夫人に、堂山のことを折に触れて数多語り伝えたのである。往時を思ひ出して、堂山より聞いた事どもを、彼女に話してくれた由である。その一話に「堂山は父と一緒に清浄光寺に来て滞在し、父はそこで死去した」との話しもあつたのである。この弘純和尚の話を真実性を確認する為には、堂山の父茂助の過去帳を見るべきだが、惜しい哉清浄光寺は、先に挙げた「遊行藤沢両御歴代系譜」によれば、

(一)天保二辛卯年十二年廿七日、

巳刻、駅内茅場ヨリ出火ニテ

書院、居間、広間、台所：貞

松三院等同時焼亡ス。

(二)明治十三年十一月廿七日、宿

内陣屋小路ヨリ出火、山内一

字残ラズ焼失……前回の焼失

ヨリ五十年目ナリ。

(三)明治四四年七月、寺内失火ニ

依り書院其他焼亡ス、一遍上人絵詞伝縁起：相伝ノ過去帳

烏有二飯ス。

という三つの記録によってもわかるとおり、その過去帳による証拠固めは、もはや全く不可能である。しかし、この証言を裏付けるような資料が、服部清道氏の「柳水亭種清」なる論稿の中に述べられている。

一つは、生家は貧しい小商人であつたらしい……

という記述と、

一説に、

六、七歳の時、父母に伴われて越後に移った。まもなく母を喪い、そこで父は、亡妻の霊をなぐさめ、併せて糊口をうるおすために、種清を伴って巡礼に出た。偶々藤沢に遍歴し来たり、遊行寺に救われることとなつた。父没後は孤児として、引き続き遊行寺に養われ、仏道を修行したが、その後江戸浅草の日輪寺の小僧となつた。……」

とあるが、この記事は、河竹調査と上輩寺の伝承とを巧妙に組合せて構成したもの、ように思われてならない。しかし、如上の諸資料からは、かの種清の出生については、どう理解しても、飛騨高山ではなく、江戸の地と解釈して間違いないようである。

しかも更に、種清が、幼少期を江戸で送つたらしい有力な記録がここされている。林美一の「恋川笑山考」(愛書くらぶ・八号)で紹介された会本「情写淫漏人形」の序文に左の事柄が記録されている、

……御殿女中とギヤマンの船は

誉ちや見れども乗られまいとなべての人のうたひしは文政のはじめ予がいとおさなき頃にして……

とある。この俗謡が流行していたのは、当時江戸のことであり、事実始めてギヤマンの船が見せ物にかつたのは、『武江年表』の文政二年(一八二〇)の項に、

向ふ両国にてもギヤマンの燈籠並びに蘭船の造り物杯も見せたり。是れよりこの方大造の見せ物出る……

とある通りで、その後、数年間は、これが人々の口の端に謡いはやされ、喧伝されていたようである。種清がこの俗謡を覚えていたとあれば、どのようにしても、幼少時の江戸存在を認めなければならぬ。

かくして、種清は江戸で生育され、幼少期に母をうしない、更には、早くに長兄をも失ひ、父と二人して旅に出たという事実は、ここに追究することが出来た。しかし何故に藤沢に赴いたか、旅中の途次の偶発的な寄宿であるのか、と考察してみるに、あらゆる点より類推して、誰か紹介者があつての藤沢往訪とみるのが最も妥当な見解ではなからうか。これは想像の域を出ないことであるが、種清家は浅草近辺に住んでいて、時宗の学林たる日輪寺の役僧の誰かと

面識を持つていた気配も感じさせられるのである。父と子の、身心の救いを求める旅の行先が、その初めから藤沢の地であり、かくて時宗本山清浄光寺の門を叩くことになったものと結論付けてよいのではなからうか。この父子の清浄光寺入山期も今のところ不明のままである。彼の父は入寺して、得度したかどうかは定かでないが、おそらく俗体のまゝ、近侍司として、当寺の寺役の補助を勤めたのではあるまいか。一方種清の方は仏道の心得があり、入山して専ら仏の道に精進の甲斐あつて、研修のため、浅草の宗学林日輪寺へ赴いたのは、父の歿後の事と思われる。

次に、堂山との称呼については、服部清道氏が「草双紙作者柳水亭種清」の記述の中で、

…法名堂山は時宗僧侶には相応わしからぬもので、後日時宗に復帰した時は法名(妙阿智俊)を与えられてゐるから、これは幼年時に越後の某寺に在った時に与えられたものと想像される。

その註として、「堂山」という法名からすると、或いは禅宗寺院ではなからうか」と述べている。たしかに堂山という名は指摘の通り、時宗僧らしからぬ名ではあるが、彼が清浄光寺に入山してから、浅草日輪寺に至る迄、この名を称していた記録は一つとしてなく、堂山の名が彼によつ

て記されるのは明治に入ってからなのである。

その堂山が学林日輪寺で研学したことは、まぎれもない事実であるが、しかし何故に、自己の人生に大いなる転機を与える事となったこの日輪寺入山の眞実は如何に解釈したものだろうか、その要因を尋ねるためにも、この日輪寺に就いて考究を試みてみたい。

この浅草の地は、当時にあつても亦きわめて刺戟の強い土地柄であつたとおもわれる。

『神田山日輪寺、時宗壇林芳薫』(昭和廿八年当寺刊)にある輪所の一部を抄出すると、

…又慶長年間火災の際現今芝崎町に移り四千六百九十二坪の替地を賜り、堂宇再營す(明治の初め此境内地の大部分は上地せらる)。…抑々当山は徳川幕府江戸時代より明治維新に至るまでは、時宗寺院の総触頭にして幕府の門末に対する宗務交渉を攝行し来り、宗門子弟の修学錬行せしむる為めに、享和年間当山三十八世唯申恵秀和尚浅草学寮を置き、宗門枢要の人材を輩出せしも、明治二十五年(一八五二)

此の学寮を藤沢総本山に移す。現今の時宗々学林の前身なり。

(参考)一、幕府時代は乘輿独礼席。

寛永年間より御連歌列席仰付られ、会席を

年々相勤め、御代替りの際は登城時服拜領の格式寺。

この書の記録からも窺えるように、当寺の格式からも過去に五人もの遊行上人を輩出しているほどで、時宗と幕府との接触は地理的な観点からも当寺が伝統的に負ってきた宿縁であつた。ことに、堂山にとつては、学林の存在が、彼の入寺入戒の一道程として、何としても履践しなければならぬ修行の道場であつた。近くには吉原の花街があり、またその周辺には私娼も屯して、彼を外道の奔に誘うには充分な環境であつた。天保期に入つてからの彼の生活は、化政風俗爛熟の余波をまともに受けて、殊のほか、彼の心身をゆさぶり続けたことも想像に剩るものがある。

天保の改革が行なわれ、歌舞伎の劇場も災火を機として、小出信濃守の元屋敷跡であつた浅草聖天町の一角に移転して来た。その町名も猿若町と名を変えて、ここに座元たちは、金五千五百両の移転費を頂戴して、新しく劇場を建てたのであつた。そしてこの劇がその後間もなく、堂山に深く関わる運命をもつようになつて来たのである。

(つづく)

千年抄

源朝臣重之公の一千周年忌に際しまして、相模に、明確な足跡をのこした歌枕「こゆるぎの磯のわかめ歌」などを権威書の中から引用をさせていただきます。

由緒に、「こゆるぎ」とも称された小田原市制も、六十年を迎えます。

皆様方には、すでにご承知の歌でしようが史談会報の紙面で、もう一度お読みいただきたいと考へました。千年忌に免じてお許し下さい。

五五六 拾芥抄 上 和歌部 二十九

歌人三十六人 源重之

参議兼忠男、貞元親王孫、相模權守、五位、至長保、

五五七 重之集。書陵部本

さかみにて

こゆるぎのいそのわかめもからぬみにおきのこなみやたれをよすらん

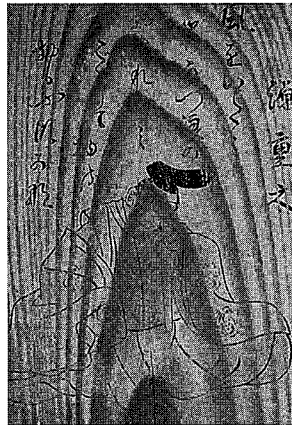
『神奈川県史』資料編1古代・中世(1) 第一三九頁

次に、

目加田さくを先生(文学博士福岡女子大学名誉教授・梅光女学院大学名誉教授)の著書『源重之集全訳』(風間書房発行)第一七〇頁から引用させていただきます。

さかみにて

歌人 源重之 日下部 庄一



こゆるぎのいそのわかめもからぬみにおきのこなみやたれにがすらん

〔通釈〕相模で(よむ)

こゆるぎの磯で、海水にわけ入って若めも刈らぬ私なのに、沖の小浪は誰に寄せるつもりで私の袖をぬらすの

か。

〔語釈〕○こゆるぎの磯―小動―相模、神奈川県高座郡小動、今寒川村の大字とす、已に正保図にも村名見ゆ―大日本地名〔参考〕古今集二十東歌 相模歌

相模歌

こよろぎの磯たちならし磯菜つむめざしぬらすな沖にをれ浪

この歌を念頭にもつ。

重之は安和二年相模權守、貞元元年相模權守に任ぜられた。その何れかの時期の作。述懐口調は

後者の時期を思わせる。

庇護者の堀河関白兼道薨貞元二年後、悲観しての頃か。

夫木抄 家集

さかみにてよめる 重之 こゆるぎの磯

こゆるぎの磯のわかめもからぬ身の沖のこ波やたれをよすらん

重之公の全容を『前掲書』、目加田先生の三頁、解説文の中から引用させていただきます。

源 重之

源重之は清和帝皇孫源兼信の子で、伯父兼忠の養子となった。わかんどおり歌人の一典型といえよう。藤原氏専権時代、官途はひらけず、生涯不遇感に浸っていた。三十六歌仙の一人である。三十六歌仙伝によれば、散位従五位下源朝臣重之〔参議兼忠三男、実者従五位下兼信男、為二伯父子-

云々〕康保四年十月任右近将監「前坊带刀長」。同月任左近将監。「兄能正朝臣依爲右少将也。」(安和元年)十一月二十七日叙五位下「府上騰讓」二年七月任相模權守。天延三年正月任左馬助。貞元元年七月任相模權守。長保年中於陸奥卒云々とあり、冷泉帝が春宮時代、带刀先生であった。冷泉帝即位後、左近将監、従五位下、相模權守となったが、帝の退位後は、左馬助、相模權守を最後に榮進の途は拓けなかった。以後、不遇の官界を去り、正暦二年太宰大貳となった藤佐理、長徳元年陸奥守となった藤実方を頼って、筑紫、陸奥へと旅をつづけては歌を詠む、みやびのくらしであった。相模權守、權守を歴任したし、父を失った若き日、目をかけて貰った陸奥守源信明、歌友駿河守平兼盛は同じわかんどおり貴族であり、又当代有数の歌人実方陸奥

句鑑賞

燕来る駄菓子屋ビルに変わるとも 榊泉
 長命で天寿を全うした作者の素直な心情を詠った句。街の中の其所此所にビルの建築の盛んな昨今、昔懐かしい駄菓子屋の姿は殆ど見当たらない。何時の間にかビルが出来てしまったのだ。そんな世情を知らぬげに、燕はビルの谷間を飛来しているのである。明治生まれの作者にとって、子供の心にささやかな夢を与えてくれた駄菓子屋の思い出が、ふっと脳裡によみがえったのであろう。

(劍持芳枝)

守と、古くは大伴宿称家持以来、歌人にとつては、憧れ、寂しみ、不遇感、の交々入りまじった感懐で親しいものとなつて、いる東国に、重之は深く馴染んでゆくが、所詮は都人であり、ことにわかんじおりの身では、客地漂泊の感が深く、重之にもまた、埋れ木、花さかぬ木と、自己を観ずる歎き、恨みが心底ふかくよどんでいる。その子爲清、致親、女子も歌人で、重之の子の僧の集、重之の女親子二代にわたつて、三家集をのこす歌の名

門となる。その子は自記するように、京にも田舎にも多く、東国で亡くした子を悼む悲痛な挽歌には読むものの胸を打つものがある。重之も多くの歌人と同じように生年不明。歿年は『尊卑分脈』に「長保二年於奥州卒」とあるから、これに一応従つて年表を作製した。

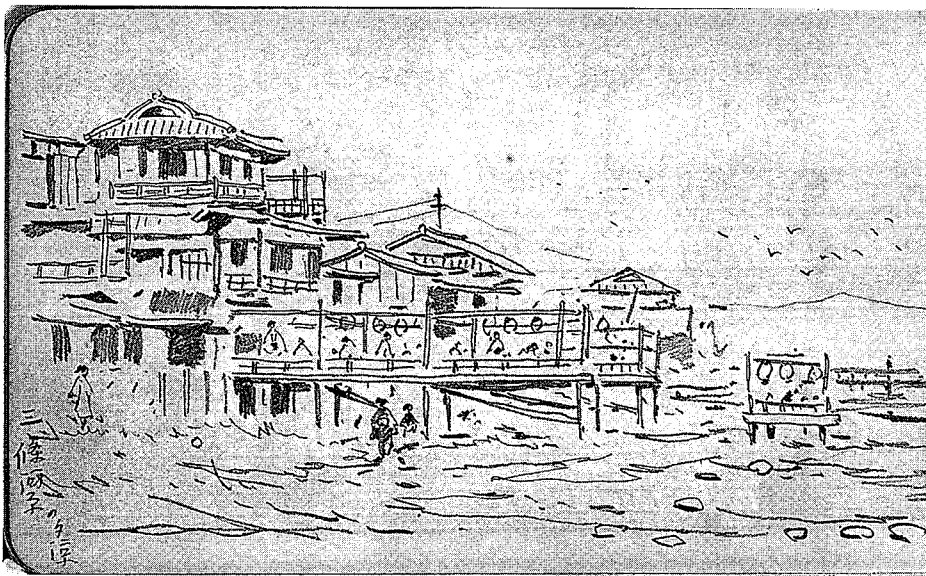
生年は、祖父貞元親王が延喜九年909十月廿六日薨。伯父(養父)兼忠は天徳二年953七月一日卒。公卿補佐で58歳とわかる。したがつ

て、兼忠は901年出生となる。弟である実父兼信は902年以後909年の間の出生であろう。二年後とみて、903出生と仮定し、約21歳頃に長子重之を出生とすれば、延長元年923Aとなる。これによつて、かりに年表を作製した。又、若くみるならば、祖父歿年909に父出生し、父25歳で重之出生とみればB、10歳若くなる。又、父30歳で重之出生とすればC、15歳若くなる。長保二年、78歳A、63歳Cで卒といえようか。ABCの推定をあげておく。

爲清、致親、女子に作歌指導をし、晩年は陸奥に子を同伴し、共に寒地の苦勞を、歌を詠みあつて慰めあう。東遊西流、漂泊の歌人よばれるにふさわしい。

地図で一目瞭然、日本国内を、当時これ程巡遊吟行した歌人はいない。重之とその歌風については拙著『私家集論』一九八笠間書院刊行予定にゆずる。

三宅克己(八四一五五) スケッチブックより



湯川玲子さん所蔵 (湯川治郎画伯が、昭和49年5月5日克己未亡人まさ子さんより真鶴町のお宅訪問の際頂戴)

源重之公の一千忌に際しまして、心から御冥福を祈念申し上げてやみません。

今後も源重之公の事跡に関心を持ち続けて行きたいと思ひました。

編者記 なお、重之に関する年表は紙面の関係から次に掲載いたします。

古文書講座 31

足柄の俳句額を読む

—その評価と調査法について—

内田 清

郷土における近代俳壇の評価

今回は明治・大正期の郷土俳壇の評価について問題提起してみたい。

飯田九一は『小田原俳壇史』で次の様に手厳しい評価を残している。

「すぐれた作家を生んだ俳壇史を持つ小田原も天保以降、明治時代に至るまで臍にあてた懐炉の灰のぬく味ほど無くなり、子規の出現も日本派も更らに反響なく、大正時代に至り全く火種子もなくなり消し炭の灰となって昭和の俳壇へとはいった。」

具体的には点取り俳句にのみ腐陳していた事を指摘している。

これは一九五一年の評論だが、以降半世紀、管見では、これを訂正した論考を知らない。

小田原文学館は、開館して六年になる。近代の小説家・詩人は扱って、高く評価されている近世の俳諧・狂歌作者にさえ無関心だから、近代郷土俳壇など視野に無いらしい。

しかし生涯学習の現代において、地域史研究が、「お上み・役場」の旗振り無しでもネットワークで集結した近代郷土俳壇を無視して良いのだろうか。自治体史においても別荘族

文化人より、草の根文化人の発掘こそ今日の課題であろう。

法楽・奉納俳句額の危機

飯泉観音の、仁王門には「法楽」と題した近世・近代の俳句額が四点掲げられている。法楽とは法会の終わりに詩歌を誦し、楽を奏して本尊を供養することだったが、一般には仏法を敬愛し善を行い徳を積んで自ら楽しむことである。

俳句額は本尊の開帳等を機会に開催された法楽俳諧の作品から数人の宗匠が選んだ俳句を額装したものである。神社の場合は「奉納」となるが、寺社堂塔に参詣すると拝殿等の内外で普請寄附者の名札や絵馬と共に多見される。

一会で樺の一枚板三枚に三百句以上を記した立派な物もあるが、風化されて読めない物、回廊に放置され、踏まれている物もある。年代は江戸期はまれで、明治期が多い。新築改修等に当って廃棄された話もよく聞く。

歴史の証言者 俳句額

明治期俳句額の歴史的な特色とし

て先ず三点を挙げてみたい。写真①は久野欠の上鎮守子神さんの奉納俳句額(明治六年)の後部である。催主はこの行事の主催者だが、欠の上の農民たちであろう。

1の進山は、明治維新で神道が国

久野欠の上大子神社奉納俳句額部分解説

催主

- 1 神鏡農 曇り農消天 初日の出 進山
- 2 振向婆 うし呂傳も奈く 閑古鳥 張无
- 3 本能く登 明て事なく 春能ふし 工
- 4 居処裳 見え天雉子裳 裸山 新山
- 5 春能野尔 出天見る山農 介ふり可那 代
- 6 少し出る 音裳耳奈い 清水哉 星水
- 7 降て行 白雲に似た 夕日可南 柳山

加りしよ理 殖やし亭 故 唾

もとす 早苗可難

明治六年(一八七三) 臯月吉辰

幻界彦敬書

火防線などの山 焼き、或は失火による山火事などの煙を心配している。

判者(選考者)青霞庵故唾は上大井村生れだが、当時の小田原俳壇の代表的宗匠で、稲苗の貸借を詠んだ珍しい

他の句も当時の自然環境を語るなど、第一に今日の創作俳句より素直に時代性を表現している。

旧村別選句数

所在 旧村	弘濟寺地藏		
	A 久野子神社	B 中沼薬師堂	C 堂
小田原	②22	2	
久野	①28	2	
荻窪	2		
多古	2		
井細田	2		
中曾根	③7		
堀之内	4		
連正寺	3		
北の窪	4		
曾府	2		
比川	1		
中新田	4		
柳原	1	2	
桑原	1		
新屋		1	
小沼		1	1
岩原	1		
塚原		2	
炭焼所		4	
中沼		①15	
狩野		②7	6
飯沢		2	2
飯山		1	6

▲写真①



▲写真②

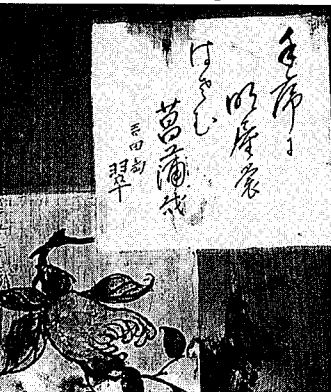
表は明治期の俳壇ネットワークの一面を表している。旧村18と25と広範囲からの応募があったが、いずも地元村の応募が第一位である。

当時の人口が不明なので、戸数比で見ると、C南足柄市弘西寺の弘濟寺地藏堂では、地元が47%、第二位の隣村雨坪が33%と予想以上に高い。A久野の場合は大村なので8%にしかない。しかしB中沼葉師堂でも地元が33%と高いことは、B・Cの様には明治二十年代になって小学校の義務教育を受けた青年たちの参加があり、俳諧愛好者が層が質的に変化し、親子或は兄弟での参加もあつた結果である。俳諧・発句(ほく)の大衆化こそこの時期第二の、そして最大の特徴である。

写真②はヌダの賤男(身分の低い男の意)の俳号で記されている。

早乙女や 老と盤見えぬ
笠のう知

若造りに衣装・化粧をしている老早乙女を揶揄しているのであろうか。



▲写真③ ▼写真④

句意に合せた様な俳号に度々出会うが、実名ではできない世界に俳号で変身できるのも俳諧大衆化の一因で第三の特色だったと考えられる。

格天井俳句の知恵

南足柄市中沼の葉師堂内陣の格天井は、竜の図を中心に写真②③④の様な九六枚の俳句絵が嵌められている。

俳句額の発展的な形態として注目される。

写真③吉田島の翠さんは女性だろうか。

手序ル 明屋(空屋)棠 はさむ
菖蒲哉

当時は平安時代からの軒菖蒲という病難よけの習俗が、当地でも行なわれていた事がわかる。

藤の花の絵が添えられている
覗可れ亭 白酒能座の
崩麗介利

は、久野・壽山のもの。白酒はどぶろくの花見酒らしいが、既に禁制だったのか、喧嘩にならなかつたのか気になる。



写真④は白露庵鎮山のものらしい。

春寒き中
尔 尊し
神の椽 鎮山

これは句も書も整っているが、絵のないのが特異である。鎮山は当時の小田原俳壇の第一人者である。

各作者が、金嶺・秋水ら近在の絵師に依頼し、費用も負担して出来た句札であろうが、格天井の区画の中でそれぞれ個性を発揮している。

この堂内には、明治十八年(一八八五)同二十年の俳句額もある。三者を合せると庶民文学の歴史を証言する貴重な文化財である。

俳句額研究にビデオと乾拓を活用

俳句額は①大きく重い・②暗く高い所にある・③風化していて読めない・④実名探しが難しい。等々が研究を阻んでいる。

しかし私たち、南足柄歴史同好会のささやかな経験から、それなりの道がある事を確認している。

関本	5			5
福泉	1			5
雨坪	5			②13
弘西寺	4			①14
刈野	3			7
刈倉	2			③10
内山	1			7
松竹	1			4
ま下	1			3
怒田	3			③10
斑目				5
松田	2			
神山		1		
古怒田	1			
向原				1
岸				3
やが		②	7	
牛島		5		3
宮の台		3		1
吉田島		2		
延計		1		
計	88	79		104
旧村数	18	25		18

計は旧村名の判明したものの数

まず①・②については、写真で困難な場合でも、ビデオカメラのナイトショットを使えば、薄暗い場所でも容易に赤外線写真が鮮明に撮れる。テレビやパソコンに取り込めれば部分拡大でも読めるのである。

写真①のように板面が汚れている文字でも、ナイトショットだと結構読める。望遠操作もできる。暗黒では駄目だが薄明りがあれば夜でも一人で調査を継続できるのが有難い。

③の風化文字は、墨が消えていても、墨跡が高く残る。拓本しか方法はないが、湿拓法は所蔵者に嫌われるので、薄紙に乾拓すればかなりまです読める。

④の実名探しは、句碑、句帳、俳句額と関係者聞き取りなどの地道な研究の積み上げで解決するだろう。

俳句額句会の主催者が富士講先達だった、例などつかんでいる。

いずれにしても今日の生涯学習運動は、そのさきがけであった近代郷土俳壇から句会のもち方を含めて学べきものがたくさんある。

近代郷土俳壇の研究は、ふるさとの文化・庶民文学研究にとって欠かせない領域である事は確かである。

弥次喜多道中?

写真は、賛助会員の鈴木蒲鉾店(鈴木一由社長)から提供を受けたものである。物置を整理していたら出てきたと云う。

裏面を見ると、昭和八年(一九三三)二月五日と筆で書かれている。

この頃の出来事を調べてみると二月二十三日、日本軍は熱河省進攻作戦を開始。翌日、国際連盟は、撤退勧告案を四十二対一で可決、松岡洋



右代表は退場した。やがて日本は、国際連盟を脱退し、世界の孤児となる訳だ。当時、政府は、「……十□対一名譽の孤立」といった言葉の入った歌謡を流し、国民の士気を鼓舞した。十□対一が、四十二対一でなく十三対一であったような気がしたので、更に調べてみると、どうもそうでないらしい。

それは、十九カ国による国際連盟理事会が開かれ、日本は満洲から撤退するよう勧告されたときの歌のようである。国際連盟を脱退するときより若干、前のようだ。それにしても、当時小学生だった我々は、意味も充分にわからず歌ったものである。

それはともかく、この頃、美人の娘が大島・三原山に投身自殺した。以来、三原山は投身自殺の名所となった。また、教員赤化事件で長野県教員が一斉検挙されたのを新聞に大きく報道された。これらのことや、いろいろな出来事を

例に、暗い世相の谷間にあったことが報じられている。

しかし、我々は、子供であったせいか、そのような暗い陰鬱な雰囲気であると感じられなかった。

右端の方は、当主の(故)鈴木愛雄^ちさん、後に松之助を襲名したことで、明治四十一年十二月の生まれのこと

が戸籍謄本で分かっている。計算すると当時、満二十四歳である。それ以外のことは、分からないと云う。写真には、撮影年月日が記入

されているだけで、他には何も入っていない。また、当時を知る人は、いなくなっているからだ。

それだけに想像を逞しくすることが出来る。写真の真ん中の二人の芸人は、弥次喜多に扮したパフォーマンスカと

小田原市長選挙

<p>小田原市長選挙 ポスター掲示場 35</p> <p>注意 1. 選挙ポスターは、投票日の前日(投票日の前日)まで掲示してください。 2. この掲示場をご利用の際は、必ず「選挙ポスター掲示場」の表示に従って掲示してください。 3. 掲示したポスターは、投票日の翌日(投票日の翌日)まで掲示してください。</p> <p>小田原市選挙管理委員会</p>	<p>3</p> <p>おさわ良明</p>
<p>投票日 21日</p> <p>午前8時～午後8時まで</p>	<p>4</p> <p>金子あそみ</p>

当 52,356 小沢 良明(無再)
20,229 金子あそみ(無新)

<p>小田原市議会議員補欠選挙 ポスター掲示場 35</p> <p>注意 1. 選挙ポスターは、投票日の前日(投票日の前日)まで掲示してください。 2. この掲示場をご利用の際は、必ず「選挙ポスター掲示場」の表示に従って掲示してください。 3. 掲示したポスターは、投票日の翌日(投票日の翌日)まで掲示してください。</p> <p>小田原市選挙管理委員会</p>	<p>大野しんいち</p>
<p>投票日 21日</p> <p>午前8時～午後8時まで</p>	<p>4</p> <p>安野ゆき</p>

小田原市議会議員補欠選挙

当 36,573 大野 真一(無元)
16,556 安野 裕子(無新)
15,320 神馬 純江(ネ新)
投票率 47.09%

思われる。それも、鈴木蒲鉾店前で写真を撮るのも、予定にはなかったであろう。芸人の右に立つのは、宮小路の芸者の感じである。芸者は、二人の芸人から「小田原の名物といえば蒲鉾。その名の知れた店に連れて行って欲しい」と云われ、鈴木松の店に誘った。

店主の愛雄さんは、珍來の客とばかり、咄嗟に記念写真を思いつき、弥次喜多に屋号の入った法被を着てもらい、専門の写真師を呼び、家族と従業員共々に撮った。

以上のように見立てたい。

左側には、この情景を見ようと、好奇心旺盛な子供たちが押しかけている。当時は、写真を撮ることさえ珍しかった時代である。

(岡部忠夫)

明治の書簡でつづる

相田軍曹と日清戦争(八)

無残、澎湖島の戦い

瀬戸長治

海軍の参戦

〔宛名〕

神奈川県足柄下郡早川村

相田宅 行 平安信

〔差出人〕

在外混成枝隊 後備歩兵

第一聯隊第八中隊

当時 金州丸 相田代吉

三月十四日夜

〔文面〕

(前村長および役場員、校長川嶋その他の者へよろしく)

別紙ハ過日相認メおき候義ニつき
ご承引相なりたく候。時下おいおい
暖気催シ、殊ニ船内ハ暑きニ過クル
ようニこれあり候。

本隊ハ、明十五日、当港抜錨(出
港)、台湾澎湖島占領の目的ヲもつて
出発いたし候。海軍ノこの後ニ参ス
ル者ハ、松島・橋立・厳島・吉野・
浪速・高千穂・秋津州ノ七艦出で、
千代田艦相加わり八艦ト相定まり
候。運送船ハ西京丸(この船ニハ*
伊東中将乗組み)、鹿児島・金州・小
倉・新発田・豊橋ノ六艘、その他、
海軍付属ノ運送船六艘、陸軍付属ノ

分二艘、都合二十二艘、明十五日当

港解纜(船出)、大島ニ至り、陸軍ハ

よほど滞在の様子ニござ候。澎湖島

占領ハ掌ヲ返スごとク易々タルこと

ト存じ候。この島ハ、明治十七年清

仏戦争ノ時、仏将クルペーノ艦隊ヲ

もつテ撃破、占領シ、もつテ艦隊ノ

本拠地トナシタル所ニテ、要害ノ地

ニこれあり候。本軍モその目的ヲ

もつテ同島占領ニ着手スル義ト存じ

候。同島ノ砲台ヲ占領シ、その砲ヲ

利用シ他砲台ヲ砲撃いたす策ニ存じ

候。右ご通知申し上げ候。

三月十四日 相田代吉

相田両家行

この外ニ水雷艇二艘参リテ候。

*伊東祐享中将のこと。薩摩藩士。
日清戦争における連合艦隊司令長
官。

敵壘に近接

〔宛名〕

神奈川県足柄下郡早川村

相田磯吉殿

〔差出人〕

はじめに

〔相田家文書〕について、「相田家系略図

☆弥生館から浦賀へ

弥生館に宿営(相田代吉より弟相田磯吉あて 明治27年9月1日

無事入隊を祝し(磯吉より代吉あて

面会に参るべく(磯吉より代吉あて

馬車鉄道で無事帰着(磯吉より代吉あて

浦賀町駐留の兄へ(磯吉より

駐留地移転の連絡(代吉より相田本家あて

贈問品の発送の知らせ

(石田弥五平より代吉あて

鈴木善左衛門の懇問文(相田代吉あて

駐留への礼状

(兄に代わって磯吉より三浦郡 石井文吉あて

帰省用洋服持参の依頼(磯吉より代吉あて

☆東京麻布第三聯隊

(東忍 見物において(代吉より妻あて

留守宅への指示(代吉より妻あて

前村長の死去

(根川・廣井長十郎より代吉あて

帰省申請書

(早川村外方村組合役場より代吉あて

海蔵寺住職の賀状(代吉あて 明治28年1月2日

國府津停車場で面会

(早川村杉崎甚五衛門・林為之より代吉あて

面会後、家族無事帰着(磯吉より代吉あて

七日十時の面会について

(石田弥五平より代吉あて

☆廣島から澎湖島へ

出征の連絡(代吉より妻あて

話によれば台湾へ(代吉より妻あて

乗船を前に(代吉より相田両家あて

馬関(下関)港にて(代吉より相田本家あて

海軍の参戦(代吉より相田両家あて

敵壘に近接(代吉より磯吉あて

澎湖島の戦い(代吉より磯吉あて

熱病に犯されて

(第八中隊部下一同より磯吉あて

お悔やみ(米神蔵石政吉より代吉妻へ)

第八中隊長からの書簡(相田代吉家族あて

表彰状(足柄下郡長事報告長

従軍記章の証(當勤局長送)

あとがき・発見された絶筆

〔文面〕

(親戚および役場、校長諸君へ
宜しく)

拝啓 当地、暖気ハことのほかニご
ざ候。敵壘ニ近接いたしおり候へど
も、未タ一戦モ仕らず候。今明日内
ニハたぶん上陸相成るべく候。快報
ハいずレ上陸後ニ相譲り候。
二白 長男・義、本月試験後、小
田原へ通学スルニついテハ、往復と
も橋の欄干ヲ渡ラザルようご注意相
なりたく、現ニ小生在郷中、相認メ
候ことモこれあり候間、くれぐれモ

在外混成枝隊 後備歩兵
第一聯隊第八中隊 相田代吉

相田代吉

〔文面〕

澎湖島の戦い

〔宛名〕

大日本帝國

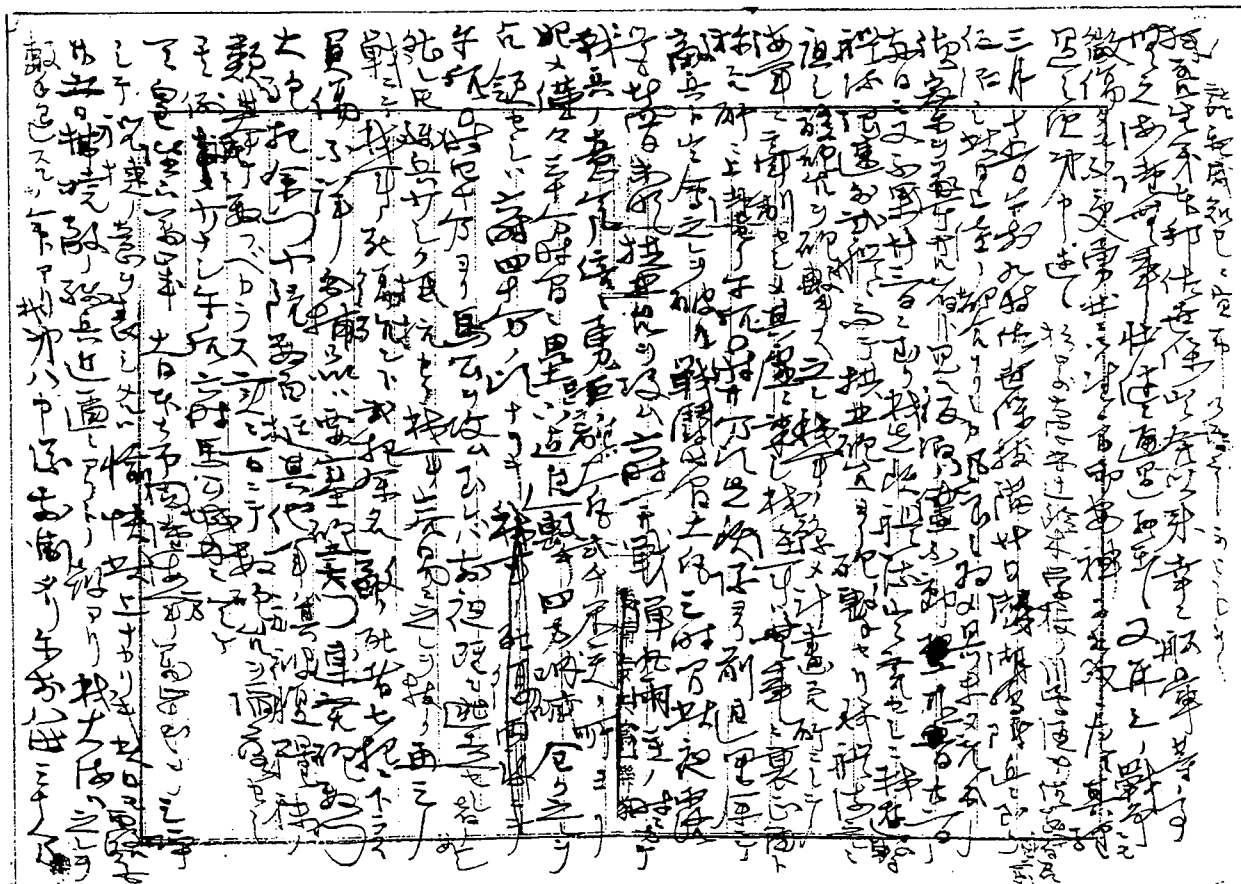
神奈川県足柄下郡早川村

相田磯吉殿 平信

〔差出人〕

於新占領地 澎湖島馬公城
混成枝隊後備歩兵第一聯隊
第八中隊 相田代吉
〔文面〕 *本文用紙は後備歩兵第一
聯隊用箋

▼明治28年3月28日 澎湖島の戦い 相田代吉より相田両家へ



* B 5判の用箋が欄外の余白までピッシリ文字で埋められている。3枚の用箋が使われているが、その2枚目は、裏側にまで数行の文章が書かれていた。

諸親戚、知己に宜しく御伝言くだされたく候。

拝啓 生義、本邦佐世保出發以來、幸いニ船暈(船酔い)ノことこれなく、海陸無事壯健ニ通過まかりあり候。また、再三ノ戰爭ニモ微傷タモ受けず、勇壯ニござ候間、御安神あいなるべく候。左ニその経過の次第申し述べ候。

(杉崎・林・辻・鈴木・学校ノ川嶋・酒井・佐藤ノ諸君ニよろしく。)

三月十五日午前九時、佐世保抜錨(出港)、廿日澎湖島附近ニ至リ仮泊シ、この日上陸ノ予定ナリシカ風強ノタメ、かつまた十分ノ偵察ヲ遂ケサルものト思へ、仮泊ノまま動かず、翌廿一日、廿二日ノ両日モまた果たさず、廿三日ニ至リ、我先鉄艦隊出發セシニ、我遊撃隊「浪速」外二艦ニ向イテ、拱北砲台ヨリ砲撃セリ。我艦隊これニ応シ該砲台ヲ砲撃ス。コレ我軍ノ予メ計画スルところニシテ、海軍ニ牽制セシメその虚ニ乗シ、我陸軍ハ無事ニ裏正角ト称スル所ニ上陸セリ。午後〇時廿分頃、先鉄隊ヨリ前進、一里余ニテ敵兵ト出会いこれヲ破ル。戦闘時間おおよそ三時間。

この夜露営、廿四日未明拱北砲台ヲ攻ム。六時開戦、彈丸雨注ノ時ニあたつテ、我兵ノ意気倍々勇ム。距離おおよそ二千米突(メートル)ノ所ヨリ始メ、僅々三十分時間ニ墨下まで進撃、四方吶喊、全クこれヲ占領セシハ六時四十分ノ頃ナリキ。午後

○時四十分ヨリ馬公ヲ攻ム。至レバ、前夜すてニ逃亡セシモノノごとシ。しかレトモ、残兵少シク抵抗セリ。我軍容易ニこれヲ抜ク。

再三ノ戦イニテ、我軍ノ死傷いたしシハ二十余名、敵ノ死者七十二下ラス負傷不詳。分捕品ハ要塞砲五、六門、連発砲數門、大砲十余門、小銃數百挺、その他軍旗・被服・糧秣ノ類挙げテ數フベカラス。実ニ一日ニシテ數砲台ヲ陥落セシその例まことニ少シ。

午後六時、馬公城内ニおいテ「天皇陛下万歳、大日本帝國陸海軍万歳」ヲ三呼シ祝捷ノ意ヲ表シタルハ愉快このうえナカリキ。この日モ露營、廿五日払暁、敵ノ残兵近邊(近付ク)シアリトノ報アリ、我大隊ハコレヲ撃退スルノ命アリ。我第八中隊前衛たり。午前八時三十分

(又、海蔵寺・久応寺へよろしく)露營地出發、至レハ即チ敵ノ隻影(わずかの影)ハ見え、土人二問フニ、前夜及びその日ノ未明、船ニ乘リ対岸の島(漁翁島)ニ逃亡セリ、よつテ休憩。この地ニおいて初メテ水浴セリ。本邦佐世保ニテ入浴以來、今日カ初メテナリキ。午前十一時馬公ニ還ル。

暑氣甚タシ。即チ命令ニヨリ暑ヲ人家ニ避ク。廿六日ハ馬公ニ滞在セリ。この日、風紀衛兵相当ニヨリ出務ス。既今ノ情況ニヨリ考フレバ、澎湖島ハ、我カ有ニ婦シタルヲもつテ、以後、戦鬪ノ模様ナシ。しかレ

トモ、敵國ノこと故反覆いかガニヤ。五千ノ貔貅(勇猛な将士の意)無事ニ苦ス。この日我艦隊、馬公ニ回航、艦砲ヲ放チタリ。廿四日ハ海軍モ応援セリ。引継キ海軍モ一ノ砲台ヲ乘取りタリ。海陸軍ニテ一日ニ、三ヶ所ノ砲台ヲ取りマシタ。しかレトモ、軍規ノ嚴肅ナル故カ、又ハ当地ハ後來目的ノ地ナルヲ承知シテカ、人夫等ニ至ルまで奪掠セザリシハ、実ニ本邦ノ世界万国ニ誇ル所以カ。(廿五日、我軍門ニ降ヲ乞フ者ナント七百人、内ニ我國ノ大佐相当ノ者これあり)近所ノ者ニハ一人ノ負傷シタル者ナシ、皆壯健ナリ。澎湖島内陸軍ノ滞在セル者ハ、歩兵三大隊(一大隊ノ人員九百廿人)、砲兵一中隊、工兵一小隊、人夫その他軍属二千八

行政庁設置ニナリマシタ。(土人ノ我用ヲナシ居ル者百余人モアリマス)憲兵モ派遣セリ。混乱中、前後不揃ヘ判読アレ。

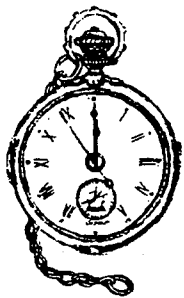
今日まで経過ノ模様ニヨレバ、清兵ハたとい百万アルモ大丈夫テス。遠キ時ハ強キようナレトモ、近ツケバ直ニ逃ケマス。我兵呐喊ノ時、軍歌ヲ歌ヒ整々々トシテ進ミシハ、必ス彼等ノ肝ヲ寒カラシメシナラン。日本ノ兵隊ハ砲音ヲ聞キ彈丸ノ頭上ヲ経、足モトニ落ツルようニナレバ死ヲ覚悟シマス。彼等ハそのようノことハアリマセン。彈ハなかなか中リマセン。小銃彈ハ恐ルルニ足リマセヌ。大砲彈ハ頭ノ上ヲ「ウナ

リ」行キマス。密集隊ニ適中シマストたくさん死ニマス。小銃ナレバ、一人カ多クテ二人ニ止マリマス。(裏面) 廿七日、朝ヨリ円頂山砲台付近偵察ノため行軍、この夜「砲台東方ニ露營、廿八日午前第八時頃馬公城ニ帰ル。この日午前九時四十分驟雨(わか雨)アリ。(米神ノ木下、松本角次郎、松本勝右衛門様ニよろしく)。

澎湖島ハ、大小二十一島嶼ノ総称ニシテ、その内澎湖島・白沙島・漁翁島ノ三島間、天然ノ良港ヲ形成ス。明治十七年清仏戦争ノ時仏國ノ占領セシ所、支那南部ノ最良軍港タリ。今ハ全ク我有ニ帰ス。清國滅亡ノ期知ルヘキナリ。東島、地質乾燥赤土ニシテ樹木ナシ。作物ハ落花生・甘藷・砂糖等適當ノごとシ。氣候ハ丁度本邦ノ六、七月頃ニ相当シ、昨今寒暖計ハ正午八十度(摂氏二十七度)内外ナリ。土人ハ逃亡セシ者アリ。

残リシ者ハ我軍ノ至ルヲかえつテ喜ヒシガ如ク、よく軍ヲ用ユ。また飲水ニハ至リテ乏シク、今ハほとント井水涸レタルものアリ。一滴ノ水実ニ千金ノ価アリ。家屋ノ構造「ボク石」ニテ積ミ、その上ヲセメント又ハ「シツクイ」ニテ塗り、屋根ハ赤キ瓦ニテ、内部ハ木材ヲ用イアリ。しかレトモ、家内ハ不潔、畳ナドハナシ。わずカ半坪位ノ所へ板ヲ並へ、その上ニ筵ヲ敷キ寝ルカごとシ。家

屋通路ノ不潔ニシテ臭氣ノ甚タシキ、実ニ驚ク外ナシ。また蠅ト虱ノ多キニ降参セリ。また蚊モイマス。その家ニ寝ヌルヨリハかえつテ露營ノ方カよろシ。豚ハ本邦ノ犬ノ如ク各所ニ居リマス。また犬アリ。コノ澎湖序ノ令尹(県知事)ハ、廿三日我艦隊ノ砲台ヲ砲撃スルヲ聞キ、同日九時該砲台ニおもむキシ、ちようど我砲彈(海軍発射セシゆえ)砲台内ニテ破裂、たメニ即死。コレヲ聞キシ市民(或ハ兵隊モアリシヤ)ハ大いニ恐レ、その夜家財ヲ片付逃走セシモノナリト。この地ニハ、我北海道ノ如クモ用兵ヲシキ者アリ。家屋内ヨリ銃器等発見セリ。今ニ兵隊ヲシキ者ハ、捕縛シ取調ヘ居リマス。朝陽門ニハ、我大日本帝國軍隊ハ汝生民ニシテ抵抗セサリシ者ハ害せず、安んセヨトノ意ノ榜示アリ。昨今帰來スル者多シ。なるほど清國ほど敵愾心ノナキ節儀ノナキ國ハアリマセン。(つづく)



落穂集

◎さる二月十三日、東証一部上場の中堅スーパー、長崎屋は、東京地方裁判所に会社更生法の適用を申請、事実上倒産したと、TVや新聞が報じていた。同社の

行き詰まりは、ご他聞に漏れず八十年代後半の過剰な不動産投資や無謀な多角投資がきっかけだったとい

う。長崎屋は、昭和二十三年(一九四八)一月、呉服販売の長崎屋蒲田店として、平塚で創業された。三年後の昭和二十六年に、東京・中央に本社を移し、翌二十七年に商号を長崎屋に変更し、衣料品・雑貨の卸・小売業に転換した。

長崎屋が、小田原に支店を開いたのは、その頃である。同じく平塚が本拠の梅屋や十字屋も小田原に進出している。三支店の開業で、小田原の需要供給のバランスは崩れ、商戦の戦国時代の幕開けとなった。

それまで、小中学校のPTAが、雑貨など産地から購入し会員に安い値段で提供しようとする目論みだともあるが、店の死活問題だと

業者から抗議をされ、沙汰止みになったことがある。

北條早雲が小田原に進出すると、農民の公租負担を軽減し、領民の信頼を得ようと試みたように、長崎屋は衣料品・雑貨の廉価販売を始め、消費者の人気を博すようになった。

◎当時、小船(小田原市)出身の志澤宏一は、「東海道で一番安い店」をキャッチフレーズで、呉服を中心にした。その後、出身地の地名に因んで「船志澤」のデパートを開き、藤沢市に支店を設けるまでになった。戦線拡大で資金不如意となり命取りになるが、それまでは、お堀端の民政党・代議士平川松太郎の邸宅を買取り住み、立志伝中の人と評されたことがある。今はその邸宅跡は、十二階建てのマンションの建設で物議を醸している。

平川松太郎(一八六〇-一九三三)は、広島県の出身で中央大学専門部法科卒業、大正元年(一九一三)小田原に来住、同四年に司法試験に合格、弁護士を開業した。大正十四年、小田原町会議員を離れ、中央政界に乗り出し、

代議士八回連続当選し、昭和二年(一九二七)、有志と計って私立小田原商業学校(現・県立小田原城東高等学校)を創設して、第三代校長に就任した。また、昭和十四年平沼騏一郎内閣のとき、通信政務次官に就任した。昔、政治を志す者は財産をすり減らし、残るは井戸と堀だけ、いわゆる井戸堀になると伝えられてきた。平川代議士が井戸堀であったかどうかは知らないが、彼は、城山・鳳巢院が面倒を見ている隣接の弘道院墓地に大きな墓石を残している。

◎ニューヨークに住む姪からの情報によると、この頃此処の治安がよくなり、日本からの観光客が増えたそうである。また、ニューヨークでは10\$以下の物品には売上税を取らなくなったという。売上税は、わが国で云う消費税と思われるが低所得層に対する政策であるにしても、羨ましい限りである。その率は州によって異なる由、地方分権の分かりやすい事例であるが、国土の狭いわが国では、到底実施するのは無理な話。

(陶生)

春爛漫

後ろは 小田原市立三の丸小学校

平成12. 4. 9



丹沢の植物

④④

城川四郎きがわしろう

スゲと呼ばれる植物の仲間がある。たぐさんの種類があり、山道を歩けばかならず何種類かにお目にかかるほど普通の植物である。

しかし、花も実も目だたないし、食用にもならず利用価値があまりないのでほとんどの人に関心を持って貰うことはない。ただ、カサスゲという種類は、昔、その葉を乾かして蓑や笠を

つくったので、年配の方はスゲと聞けばすげ笠を連想されるに違いない。この仲間ほどの種類も葉や花の似ているものが多いので識別が難しい。面倒なことに、根から掘り採った標本で、成熟した果実がなければ種類識別がほとんどできない。だからかなり植物に興味を持っている人たちでもスゲ類は敬遠しがちにな

イセアオスゲ (かやつりぐさ科)
Carex karasidaniensis



果実

筆者原図

さて、ここにご紹介するのはイセアオスゲというスゲの一種で、最初、三重県で見つかったアオスゲの類なので、その名がある。関東南部から、東海地方、紀伊半島に分布する。神奈川県では丹沢の高いところにしか分布しない。分布域から考えれば箱根にも分布するように思われるが今のところ見つかっていない。面白いことに紀伊半島では標高の低いところに生え、高地には分布しないが、丹沢では千米以上の高地にしか見られない。本種が丹沢に分布することがわかったのは比較的近年で、勝山輝男氏の研究による。このスゲの特徴は花茎が葉よりも低いことである。ふつう、スゲ類の花茎は葉より高いから、その点を注意すれば歩きながら本種を見つけることができる。果実の先が明らかに二裂していることや、果実に縦の脈がはっきりしていることを確認できればまず本種に間違いない。やや稀な植物である。



紅蓮洞・坂本易徳

③4

岡部 忠夫

(前号(99・10月発行))

紅蓮洞・坂本易徳と一緒に「函東会報告誌」を編集していた相澤鉄之助は、騎兵大隊に入営したが娑婆との縁が切れず、幹部候補生の教育を受けながら、篤農家相手に駒場・東京農林学校試験園で栽培果樹、桑苗園芸用種子の斡旋をすと呼びかけていた。

相澤鉄之助の篤農家への呼びかけには、己の利益など毛頭考えず、農作物の種類の増加、品種改良などによる増産によって日本の農業を豊かにしようとする気持が先立っていたのであろう。農を通じての富国への夢があったと思われる。

東京農林学校は、明治十九年(一八八六)七月、駒場農学校と東京山林学校を合併して、農商務大臣の管理する専門学校として設立され、修業年限は三年間であった。

相澤鉄之助は、明治二十二年十月この学校を卒業す

鉄之助には、卒業時に東京農林学校が帝国大学農科大学に昇格することなど知らなかったかも知れない。

農科大学設置の勅令が交付されたのは、その案が文部大臣、農商務大臣連名で閣議に提出された二日後に裁可されている。

現在の法令制定からすると極めて早い。電撃的と云っても差し支えない。

農科大学を新たに設ける理由は、東京農林学校が次第に規模が大きくなり、その管理が農商務大臣に属していたからであった。

教育事務を文部省に纏め統一したのは、管理面からも経済の観点からも効率が良い、と考えたからである。今の省庁間の縄張り争いを考えると、明治という時代は、政治の仕組みが違っても、その対応はす早い。西欧にすこしでも早く追いつこうとする懸命な姿勢の反映であろうか。

それにしても、合併された東京農林学校は、当座まっこと扱いにされていた。東京農林学校において教授であった二十一名のうち、農科大学教授として発令されたのは二名だけで、ほか

十九名は助教であった。また、旧東京農林学校から農科大学に引き継がれた学生徒は、高等中学校(旧高等学校)で勉学していないことを理由に、農学士の称号を授与されても、帝国大学農科大学の卒業生と称することは、出来なかった。

その点、小田原で鶏が沢山飼われるようになったか明らかでない。牛肉は、まだまだ庶民の口には縁遠いとみえて、片岡永左衛門は、『明治小田原町史』に書いていない。僅かに、この年九頭の乳牛と牛乳搾取高が年間、六十九石五斗二升と記すだけである。一日換算、千匁のパックが三十四本分採れた計算になる。

だが、『明治小田原町史』の「明治二十二年物価表」には関心が寄せられる。それは、八、九月ころから米・塩・醬油の高騰ぶりを伝えていることだ。

このことについて、『近日本総合年表』(岩波書店)には、凶作による物価騰貴をきっかけに、企業計画に破綻を生じ、物価・株価の下落が始まった、と記してある。

この書では、日本最初の経済恐慌「一八九〇年恐慌」と説明している。

しかし、この書の典拠となった『金融六十年史』(東洋経済新報社・大正十三年十二月刊)には、明治七年、既に恐慌が起きたことを記している。それは、正貨(金貨)の

育が盛んになっっている。

育が盛んになっっている。

海外流失が多く、金融が逼迫したのが直接的原因となった。

明治初年、政府が認可した民営資本による国立銀行が、多少の紙幣を発行していたが、正貨の流失が甚だしくなり、市中の金融が次第に逼迫の兆しを表してきた。

それは、金貨の世界的騰貴のために、金貨の価値が高まり、金貨と紙幣の間に価格差が生じた。そのため紙幣の交換を請求する者が次第に増加し、紙幣の流通が極めて困難となり、発行は殆どされなくなった。

また、ここ数年間、活況を示してきた各地の商業は不振となり、大商人は好景気に乗って手元を広げた。はしやいで浮ついた弊害が一遍に吹き出した。商況の不振は、各方面に亘って大きな打撃を与えたのである。

明治七年の恐慌は、通貨縮小(デフレーション)により齎らされたのである。まだ、基礎が出来上がらない維新政府を襲ったもので、云うなれば、体力も充分でない幼児が脱水状態に置かれたようなものである。

その危険状態を脱したのは、西南戦争(一八七)の勃発で、それを機に不景気は終わりを告げた。また政府の基盤は固まった。

経済社会は、好況不況を重ねながら、十九年に入ると活発化の胎動が見られ、それは、資本主義経済への基盤が固まりつつある時期でもあった。『近代日本総合年表』が、日本最初の経済恐慌とするのも、その意味が、この辺にあるのだろうか。

この時期は、明治二十三年(一八九)まで続く。まず、企業熱は、鉄道事業に始まり、次に紡績業に移り、続いて鉱山業に波及し、更には商工業の会社設立が続々計画された。その間、多くの資本が新規事業に投下され、また、鉄道公債、海軍公債の募集が行われ、この方面にも、巨額の資本が固定された。

識者の中には、その景気加熱が金融に及ぼす影響を考え、密かに憂える人が少なくなかった。三宅雪嶺もその一人で、彼は『同時代史』で、海軍公債のことを、「奇異なる公債」と記している。政府は財政の緊縮

政策をとっており、その方針に反していたからに他ならない。

しかし、当時、日本の海軍は劣勢で、清国の海軍は脅威的であった。だが、海軍の増強には、莫大の費用がかかり、単年度の歳入では賄いきれなかった。そこで、背に腹を換えられずやむを得ず海軍公債を発行した経緯がある。

この恐慌のことを、『函東会報告誌』(第十四号 明治二十三年十二月)に取り上げ、「雑報」で次のように伝えている。

明治二十三年が終わろうとしている。そこでこの年のことを公にしたいが、我々は、「云うべきことの多くないことが残念だ。一言で云うと不景気な年であった。しかし、不景気は自然現象ではなく、社会現象である。人間社会の出来事であるから

には、世人は、よく不景気を挽回し元の状態に戻すことが出来るであらう。

明治二十三年のパニックは、あたかも将来を夢見た青年が結核にかかり、微熱が続いた状態にあった。それが、三年目になると

略血して安静を余儀無くされたようなものである。

明治二十五年になると最悪の状態となるが、翌年に入ると小康を保つようになり、明治二十七年には健康も回復するようになるが、幸か不幸かこの年の明治七月二十五日、清国と事を構え、八月一日、清国に宣戦布告(日清戦争)した。我が国の殖産興業に向けられていた力は、戦争目的に注がれるようになった。

※ 相澤鉄之助は、この『函東会報告誌』第十四号に「歳暮の感」を寄せており、次のような意味である。

昔のことを思い出してみると、忽ち目の前にその様子が思い出され、昨日のことかと思う。当時、発奮したことも過去のもの、暗夜のように見通しがつかず夢のようだ。夜中に灯を前にして、これから先のことを考える

と、滅入った感じになり、前途は茫々として望むことは無理だ。「光陰矢の如く」の譬えがあるが、その矢より早く過ぎ行く今日この頃、流れる水にも恥じる気持ちだ。ろくろくなすことのない身の上、あ、この想い、彼を思えば万感交々、胸がきゅつと引き締められる。感慨の情を禁じえない。嗚呼、ああ、この情を誰に向かつて話しかけてよいのだろうか

「彼を思えば」の彼は、ライバルの意味ではなからう。鉄之助の兄の親之助と思われる。

親之助については、前に述べた。修業期間四カ年の東京大学予備門卒業を前にして病に倒れ、学費が続かず退学を余儀なくされ、米国に渡り彼の地の情報を、度々、函東会に寄せ、『函東会報告誌』に「アメリカ通信」として掲載された。「彼を思えば」を、あえて記さなかったのは、函東会員には、すぐさま鉄之助の

兄と受け止めると見たからであろう。鉄之助は、客観的に書こうとする気持ちがある。また、鉄之助には、父・延助のことが、脳裏に横たわっていたと思われる。

延助は、南足柄の刈野で小学校で教員を勤め、親之助、鉄之助二人を東京に遊学させる学費を、そう豊かではないと思われる生活のなかから捻出している。

延助は、二人の伴に、旧藩や豪農の子弟に比べ肩身の狭い思いをさせないようにと、「函東会の賛助会員」となっている。延助は、背伸びしているという他はないが、親心を抜きには考えられない。

鉄之助が、「歳暮の感」を記しているとき、延助は元気でいたのだろうか。あるいは、亡くなっていたかも知れない。残念なことに除籍謄本を閲覧する手だてがないことだ。

嗚呼、
歲月人を待たず何でこのように急であるのか。光陰の我を駆るの
は、何のためか、日月

はかくの如く無情なのか。嘆きの声を出さないと云わないでくれ。歳月の無情なるも亦是非もない。この感、この情に更に重きを加えるなど、どうして知ることが出来るだろうか。明治の二十三年今や去ろうとしている我々は歳末に際して、一言の感想を述べない訳にはいかない。

鉄之助の感慨は、一転する。そもそも、我々の今日の境遇を一言で云うならば、現在の社会に於いて翼を休めているのは、いつの日にか雄飛しようとする志があるからである。今日の時運に際して、声高らかに叫ぶのを抑え忍んでいるのは、他日、世人を、あつと驚かせようとする気持ちがあるからだ。蟄居沈黙しているために、どうして生気を失い、浮かぶ時がないと云えようかと、云った妙な有様で

あるが、「請見多年成業後」とは、木戸孝允公の作であると聞くが、この一句は、我々青年の境遇を穿った格言である。

この文に、強気と弱気、それに、功名心が交錯しているが、鉄之助が、いま置かれた立場を反映していて厭味はない。

功名心には、青年の意気が感じられ微笑ましい。強気には、どんな前に出ていくような雰囲気、躍進しているような気分に入りたからである。弱気は、鉄之助の自省が働いているからだ。

そこには、明治の青年の健康な意気込みと云うか、その鬱勃たる気構えを感じない訳にはいかない。

鉄之助の稿が、函東会の機関紙に載ったとき、紅蓮洞・坂本易徳は、すでに編集主任から離れていた。易徳は、彼なりに生活に問題を抱えていた。このことはあとで記したい。

鉄之助は、明治二十五年

(一六三)秋、函東会宛ひよこり便りをしていいる。北海道からだった。この地に渡ったのは、春か、秋頃であらう。

手紙には、「儘ならぬ浮世、貧乏暇無し」の諺の通り疎遠に流れてしまった」と記してあるが、そのまま受け止めてよからう。

鉄之助は、明治二十三年十一月二十九日、終末試験に及第し、この後、三ヶ月間見習士官を命じられ、明治二十三年四月、陸軍三等獣医(後の獣医少尉)に任官した。そして、正八位に叙せられた。

鉄之助は、東京農林学校が、東京帝国大学に較べると、社会的評価が低いのを知っていたのであらう。肩書きに箔を加えようとして、幹部候補生を志願したのかもしれない。

しかし、これらの肩書は進路の選択には役に立たない。任官したといっても予備役である。戦争で召集されなければ活躍の場がない。正八位の位階も、宮中での序列だけである。中央官庁

の要職は土肥薩長が占めて

いる時代だ。まして、戊辰戦争で政府軍に背いた小田原藩である。鉄之助には、直接関係なくとも小田原藩の支配した地の出身であるとして、十把一絡げに扱われたに違いない。たとえ、下級官吏には登用されたにしても東京農林学校卒業では、職場は限定される。それに、鉄之助には闊朗の手蔓はない。鉄之助は、日頃それを意識していたと思われる。

先に記した「歳暮の感」の末尾につきのような意味合いのことを述べていいる。我々青年たる者は、將來、社会に雄飛するためには才智を涵養鍛錬するの他に道はない。無形的な実力すなわち、學術を研究し才智を増進し、心を広く強く保ち、志気を養い育て、將來に備えて準備しなくてはならない。

鉄之助の職が限定されるのは、東京農林学校に入学以来、宿命的なものを持っていたのかも知れない。

(つつく)



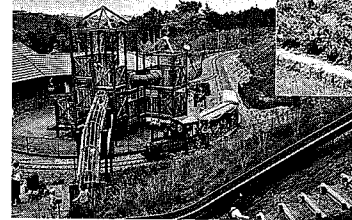
↑4/29
スーパー アプリ開店



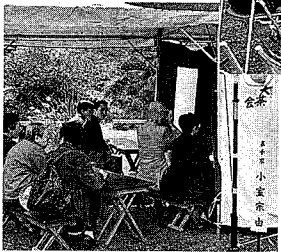
←春たけなわ



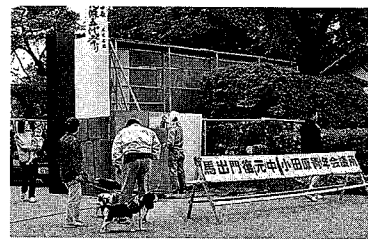
↑4/29わんぱくらんど開園



↓4/22~23 石垣山大茶会



馬出門復元→



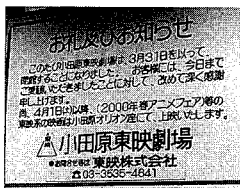
街
さ
ま
ざ
ま



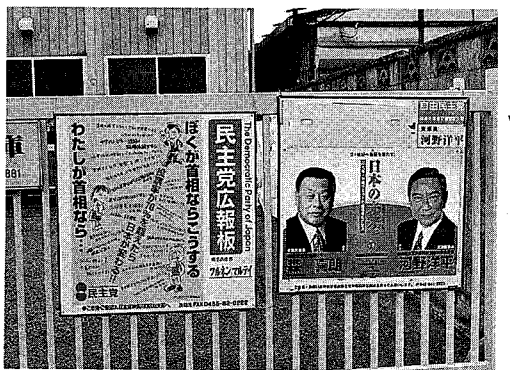
↑4/1~2 かまぼこさくら祭



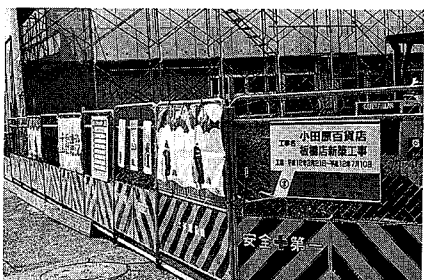
↑学区がマンション売出しに



↑3/31 東映劇場閉鎖



←自民党 VS. 民主党



←板橋に
スーパーマーケットが



◇おだわら

—歴史と文化—
No.13・00・3
A5 63ページ

編集・発行

小田原市役所企画部

市史編さん課

小田原市城山四一丁

〒316-5131

定価 八五円(税込)

【論文】

師長国造と坂の歴史

鳥養 直樹

【随想】

小田原市の郷土史研究について

三津木国輝

【歴史の証言—ヒアリング調査から—】

福沢プラン 生活カリ

キユラムの周辺

(露木喜一郎氏談)

【史料紹介】

皇国地誌久野村誌(草稿本)の発見 田代 道彌

寿昌寺の岡本秋暉花鳥図



相澤 正彦

【随想】

「小田原市史」通史編

「近世」

【市史の広場】

小田原北条氏と箱根竹一

箱根道竹道化との係わり

に触れて 岩崎 宗純

・国府津番匠補遺

久保健一郎

作家の手紙「井上康文」

杉山 幾一

【市史史料展寸評】

集約された時代の情景

高津 和代

以上のうち、三津木国輝

の「小田原市の郷土史研究

について」は、小田原史談

会の創設時代のことを記し

ており、小田原史談会員に

一読をお勧めしたい。なお、

郷土史研究で功労のあつた

中野敬次郎氏と立木望隆氏

の業績を讀んでいる。

秦野市史編さん委員会

秦野市寿町三番三

〒414-8186

昭和四〇年以降の秦野市

「秦野市史」現代編

第二期 編纂事業に向け

て 岩本 純明

・戸川の領主戸田氏と現成

院殿活眼長快大居士

大原 信男

・比企一族の顕彰

—東松山市からのメッ

セージ—

・大槻東陽の研究(3)

原 孝郎

・秦野と日本武尊

垣下 嘉徳

・ふじ道をゆく(養毛から田

原・曲松・吉田島経由関本

まで) —富士講碑を尋ね

て— 小林 謙光

【二波万波(4)】

・南矢名字根小屋付近の字

名について 星野 隆夫

小林謙光氏の「ふじ道を

ゆく」秦野市から開成町に

至る迄の富士講碑を主とし

て取り上げている。

この他、「小田原史談」、

「史談足柄」、「足柄の光」

などに小田原・南足柄・山

北など各地の「富士信仰」

の労作を発表されており、

西相模の大部分を網羅され

たことになる。そのご努力
に敬意を表したい。

波 濤

第3号



早川交友会OBの会

◇波 濤

第3号

平成十二年五月

A5 48ページ

発行 早川交友会OBの会

定価 六〇〇円

交友会とその後の私

日下部長作

小さな「松下村塾」

加藤 利之

私の店は「貸本屋」

大津 洪

あのころ

竹井 正彦

郷里早川を後にして

鈴木 信一

ふるさと

山口 郁代

聖五月

鈴木 信一

「幻の花」

山本桂一郎

ソーシアルダンス

青木 照明

交友会と私

山口 郁代

その後と近況

山本 久江

内田 今子

・行んで 青木ハツエ

・青春の一頁 瀬戸ゆき子

・丸山真男を偲び学ぶ

真田 善夫

・追憶の記 日下部長作

命さんの墓に詣でる

加藤 利之

・後記に代えて

山本桂一郎

「波濤」は、早川の青年た

ちが敗戦後、組織した交友

会の機関紙で、創刊号、第

二号は、昭和二十一年に発

行されている。第三号はこ

の度、交友会のOBにより

発行された。

戦後と云つても、敗戦よ

り既に55年も経っていて、

昔の事になる。その頃、各

地に、青年の手による文化

活動が盛んであった。早川

の交友会の活動も、その一

つであった訳で、虚脱状態

からいち早く立ち直つたの

は、青年たちである。交友

会OB代表の日下部長作氏

は、「夢と希望、その挫折、

恋愛や失恋それぞれの悩み

の織りなす光芒の中でうた

かたのように消えて行った

集まり」の我々の考え方や

体験を残すことも意義ある

ことであろうと、この度の

復刊になったと記す。戦後と現在とで、OBと青年とでは、考え方や行動に落差があり、交友会OBが、その記録を残そうとして「波濤」の刊行、その例は殆ど無く貴重である。今後とも発行継続を望む次第。

◇時 空

第16号
00・4
A5 63ページ

発行人 鈴木 一正

発行所 横浜市金沢区谷津

町会 110 鈴木一正方

【小説】

小田原史談会総会

小田原史談会総会は、平成十二年四月十五日(土)十三時より小田原市立図書館に於いて開催。平成十一年度事業報告、同決算報告、監査報告が行われ、続いて、役員改選が行われ、いずれも承認された。次に平成十二年度事業報告案、同収支予算案が提案され承認された。

（他の役員名は略す）
なお、前会長岡部忠夫氏は、退任の疑問に対し次のように答えた。

「このように健康です。病気の訳ではありません。史談会がいつも生々発展することを願うてのことです。会員皆さん多士済々の方が多くおります。会の空気を沈滞させてはなりません。そのため一期二年で退き、あとは、編集のお手伝いさせて頂きたい」と。

引き続いて、十四時より小田原市文化財保護委員長杉山博久氏により「日本考古学の伝統」と題して講演が行われた。杉山氏は、日本考古学成立の基礎を作ったのは、大森貝塚を発掘した東大理学部動物学お雇い教授のモースであるが、

- 新役員
- 会長 山口 一夫
 - 副会長 曾我 保夫
 - 〃 向山 重忠
 - 〃 吉池 清
 - 〃 剣持 芳枝
 - 〃 石綿 勉
 - 編集委員長 勝俣淳一郎
 - 研修委員長 鳥居泰一郎
 - 会 計 武田 敏治
 - 積立金会計 伏見 弘
 - 庶務 植田 博之

平成11年度一般会計報告

収入の部

項目	予算額(円)	決算額(円)	増 減	摘 要
前年度繰越	282,600	282,600	0	
預り金	9,000	42,000	33,000	前納会費*
会費	1,290,000	1,374,000	84,000	458名
預金利子	400	437	37	9月、3月
合計	1,582,000	A 1,699,037	117,037	

支出の部

項目	予算額(円)	決算額(円)	増 減	摘 要
総会費	30,000	19,950	▼10,050	
会議費	90,000	88,764	▼1,236	
連絡費	180,000	53,267	▼126,733	
交際費	70,000	20,350	▼49,650	
事務用消耗品	10,000	16,935	6,935	
振込手数料	10,000	8,190	▼1,810	
名宛ラベル	70,000	36,087	▼33,913	
研修委員会費	110,000	110,000	0	
編集委員会費	800,000	800,000	0	
会員名簿印刷	50,000	0	▼50,000	印刷年度変更
積立金	100,000	100,000	0	12.2.1積立
予備費	62,000	96,537	34,537	
合計	1,582,000	B 1,350,080	▼231,920	

次年度繰越金 A-B=348,957円

時 空

第七号の目録	編集費(円)……1
大森の下で	大森の下で……22
漱石墓参	漱石墓参……42
「青山学院」	「青山学院」……43
江藤淳参考文獻目録	江藤淳参考文獻目録……44
昭和54年(平成10年)下	昭和54年(平成10年)下……45
北村透谷参考文獻目録	北村透谷参考文獻目録……46
「時空」は創刊八年目にな	「時空」は創刊八年目にな……47
と云う。いつも思うのは、	と云う。いつも思うのは、……48
よくぞ継続発行されてきた	よくぞ継続発行されてきた……49
事業報告、決算報告、収	事業報告、決算報告、収……50
支予算は次の通りである。	支予算は次の通りである。……51

「青山学院」 菊田 均

【書誌】

江藤淳参考文獻目録

昭和54年(平成10年)下

鈴木 一正

北村透谷参考文獻目録

平成11年

鈴木 一正

「時空」は創刊八年目にな

ると云う。いつも思うのは、

よくぞ継続発行されてきた

事業報告、決算報告、収

支予算は次の通りである。

説された。

古学の本格的展開を計った

忘れられない人であるとい

説された。

古学の本格的展開を計った

忘れられない人であるとい

説された。

古学の本格的展開を計った

忘れられない人であるとい

説された。

古学の本格的展開を計った

忘れられない人であるとい

説された。

古学の本格的展開を計った

忘れられない人であるとい

説された。

古学の本格的展開を計った

忘れられない人であるとい

説された。

古学の本格的展開を計った

忘れられない人であるとい

説された。

平成11年度 編集委員会特別会計報告

*前納会費内訳(平成11年度預り金)

区 分	収入額(円)	支出額(円)
前年度より繰越	1,286	
本会計より繰入	800,000	
賛助会費	760,000	
寄付金	30,000	
預金利子	64	
会報印刷費		1,407,000
会報発送費		94,210
編集費		64,460
事務費		6,338
次年度繰越金		19,342
合 計	1,591,350	1,591,350

平成12年度分	城山 中野 教樹 久野 粕川 徹哉 箱根 天野 宏 山 口 磯部 正人 酒本 勾 植田 博之 酒 句 蛭間 節子
平成13年度分迄	山北 藤井 良晃
平成16年度分迄	兵庫 沼田 晃

平成11年度 総集編積立金特別会計報告

区 分	収入額(円)	支出額(円)	摘 要
前年度より繰越	779,259		前任者より引き継ぎ
特別会費入金額	20,000		10冊×2,000円 残部180冊
本会計より繰入	100,000		平成11年度分
寄付金	20,000		岡部忠夫氏
預金利子	933		
次年度へ繰越		920,192	
合 計	920,192	920,192	

【収入内訳】

賛助会費：[3口] 鐘紡(株)小田原工場、ヤオマ
サ(株) 2法人 ￥60,000
[2口] 足柄香粧(株)、(株)田代商店、小田原魚
市場、小田原瓦斯(株)、J A小田原、(株)籠清、
カネボウ化粧品鴨宮、さがみ信用金庫、
みみずく幼稚園 9法人 ￥180,000
[1口] 52法人 ￥520,000
合計 63法人 ￥760,000

寄付金：

市川 一郎氏 ￥20,000
日下部庄一氏 ￥10,000
合 計 ￥30,000

【支出内訳】

会報印刷費 '99.6. No178 40ページ
'99.10. No179 36ページ
'00.1. No180 30ページ
'00.3. No181 28ページ
合 計 134ページ

会報発送費 会員の他、地域の小・中・高校、
各文化機関への郵送料・封筒代等
編 集 費 執筆者、編集者等の連絡費用、お
礼、編集打合わせ費用、コピー代、
フィルム代、DPE代、写真複写
代等

事 務 費 文房具代等

預金額：J A神奈川信用 普通預金 456,933
さがみ信用金庫 定期預金(自由金利型12年5月満期) 243,259
" " (自由金利型13年2月満期) 220,000
合 計 920,192

平成11年度 研修委員会特別会計報告

月 日	方 面	人員	収入額(円)	支出額(円)
	前年度繰越金		275,688	
4/2	中村郷方面	61	4,200	
6/2	湯河原方面	49	150,000	150,777
9/29	三島沼津方面	32	129,000	154,767
11/3・4	上州信州方面	12	421,855	441,758
1/23	明治神宮方面	54	295,600	278,275
	本会計より繰入れ		110,000	
	利 息		92	
	使 用 料			700
	次年度繰越金			360,158
計			1,386,435	1,386,435

監査報告

平成12年4月8日、会計より提出されました、現金出納帳、銀行預金通帳、定期預金証書、現金、各領収書を調べましたところこれらの決算書は、正確であることを認めます。

会計監査 馬橋正平 (印)
" 杉山竹二 (印)

平成12年度 一般会計予算

収入の部

項目	前年度予算額	本年度予算額	増減	摘要
前年度繰越	282,600	348,957	66,357	
預り金	9,000	0	▼9,000	前納会費*
会費	1,290,000	1,350,000	60,000	450名
預金利息	400	400	0	9月、3月
合計	1,582,000	1,699,357	117,357	

支出の部

項目	前年度予算額	本年度予算額	増減	摘要
総会費	30,000	50,000	20,000	
会議費	90,000	90,000	0	
連絡費	180,000	60,000	▼120,000	
交際費	70,000	50,000	▼20,000	
慶弔費	0	40,000	40,000	
事務用消耗品	10,000	20,000	10,000	
振込手数料	10,000	10,000	0	
名宛ラベル	70,000	50,000	▼20,000	
研修委員会費	110,000	150,000	40,000	
編集委員会費	800,000	850,000	50,000	
会員名簿印刷	50,000	50,000	0	
積立金	100,000	200,000	100,000	
予備費	62,000	79,357	17,357	
合計	1,582,000	1,699,357	117,357	

*前納会費内訳(平成12年度予算預り金)

平成十一年度事業報告

・4月2日(金)
史跡巡り 中村郷を尋ねて
講師 船津常治氏

・4月24日(土)
総会 小田原市立図書館
講演「早雲を語る」
講師 湯山浩二氏

・5月28日(金)
錦心流琵琶「敦盛」
奏者 藤野銘水氏

・5月28日(金)
曾我傘焼き祭り(役員出席)

・6月2日(水)
史跡巡り 頼朝の旗揚げの跡を追って
講師 高橋 徳氏

・7月11日(日)
北条氏政・氏照公墓前祭(役員出席)

・9月27日(日)
久野古墳慰霊祭(役員出席)

・9月29日(水)
史跡巡り 三島・沼津方面を尋ねて

・11月3日(水)~11月4日(木)
史跡巡り 上州・信州方面を尋ねて

面を尋ねて
・1月23日(日)
初詣 明治神宮、目黒不動尊、豪徳寺

「小田原史談」

No.178(7月) No.179(10月)
No.180(1月) No.181(3月)
4回発行

役員会
4/24(土) 7/20(火)
10/19(火) 3/18(土)
4回開催

平成十二年度事業計画

- 一 会員研修(史跡巡り) 五回
- 二 「小田原史談」発行 一八二〜一八五号(六月、十月、一月、三月の予定)
- 三 総集編第四巻の発行
- 四 その他
 - ・会員名簿の発行
 - ・役員会 必要に応じ随時開催
 - ・地区役員会の開催

前羽・川勾地区 歴史散歩

【日時】平成12年5月18日(木) 国府津駅前8時50分集合

【講師】石塚勝治氏 船津常治氏

【コース】国府津駅前―清正公―国府津5丁目(旧別荘地)―常念寺―長泉寺―近戸神社―町屋公民館(昼食・石塚氏による青峯信仰の話)―浅間神社―押切海岸―一望の地―御散原 荒神さん(二宮町)―川勾薬師堂(二宮町) 三時解散。

船津氏の案内により希望者は川勾神社を參觀

訃報

和田 登さん(小田原市東町三十一〜三十三・小田原史談会副会長)
去る三月二十六日逝去されました。
享年八十歳

ご冥福をお祈り致します。



【参加費】無料

【参加者】山口一夫、勝俣淳一郎、内田雅廣、岩本武、船津常治、中尾繁雄、遠藤正治、杉山薫瑩、高橋佐年、岡部忠夫、曾我保夫、佐宗



特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店
小田原銀座 アオキ画廊
 熱海 アオキクリニック
 飛鳥屋
 紳士服の **アメリカヤ**
 (株) アルファ
 伝統工芸 **石川漆器(株)**
 税理士 石原和夫事務所
 伊勢治書店
 ●伊豆箱根トラベル 営業所
 画材 ガクブチ **ゆうえ**
 ●かまぼこ
株式会社 小田原魚市場
 ◎小田原ガス
 小田原市農業協同組合
 小田原報徳自動車
株式会社 オートセンター・スギヤマ
 オリオン座
 かまぼこ 籠 清
 鐘紡株式会社小田原工場
 神尾食品工業 製
 木地挽 日下部産業 製
 かみやま小児科クリニック
 興電社
 小伊勢屋
 国府津館
 (有)小松石材店
 さがみ信用金庫
 崎村学院
 趣味のごぶく さくらい

正栄堂
小田原 **かまぼこ**
 石寿堂スポーツ
 大営不動産
打とうぼん 小田原城趾前田毎
網元直営 **あさる海**
 ● **ニ宮**
 茶半家具株式会社
 ちんろう本店
 土谷建設株式会社
 角田ガクブチ店
 東京電力(株)小田原営業所
 株式会社 東華軒
 トーホー建物製
 鳥かつ樓
 和菓子 菜の花
 八小堂書店
 八子マサ
 平井書店
 株式会社 報徳
建築金物 家庭金物 (株)星崎仲吉商店
 本多時計店
 * 町 **松坂屋**
 学生専科 ● **マルク**
 諸星運輸グループ
株式会社 美濃屋吉兵衛商店
曾我の梅子 羅幸・かまぼこ **美の政**
 みみづく幼稚園
 ヤオマサ株式会社
 山口菓子舗
 防災器具 優光社

正雄、寺田正、吉池清、向山重忠、大木光由、植田博之、名和稔雄、山本博子、石綿勉、湯川玲子、相原俊夫・佐知子、横沢正美、内田公子、遠藤定雄、柏木幸子、早川初枝、田口誠一、内田美枝子、落合清、早野廣司・尊子、石塚勝治、伏見弘、志村久、剣持公一、和子(以上38名、敬称略、順不同)

お知らせ
 紙面の都合により、石井富之助氏の『小田原叢談』、菅沼博氏の『私の青春』、片岡永左衛門の『片岡日記』は、次号以下に連載致します。
 次号の原稿締切りは八月末です。

小田原史談会史跡巡り
家康のふるさと岡崎へ!
 平成12年9月21日(木)
 午前7時小田原駅出発
 見学場所
 六所神社、岡崎城、伊賀八幡宮
 大樹寺、滝山東照宮
 費用 7,200円
 受付 9月8日(金)
 午前9時
 伊豆箱根トラベル小田原営業所
 会費をご用意下さい

従来、会員の方々に葉書でご案内を差し上げておりましたが、今回より止め、代わって会報に掲載致すことに致しましたので、お忘れなく記録に留めおかれませうようお願い申し上げます。

小田原史談(年四回発行)

年会費 普通会員二千円